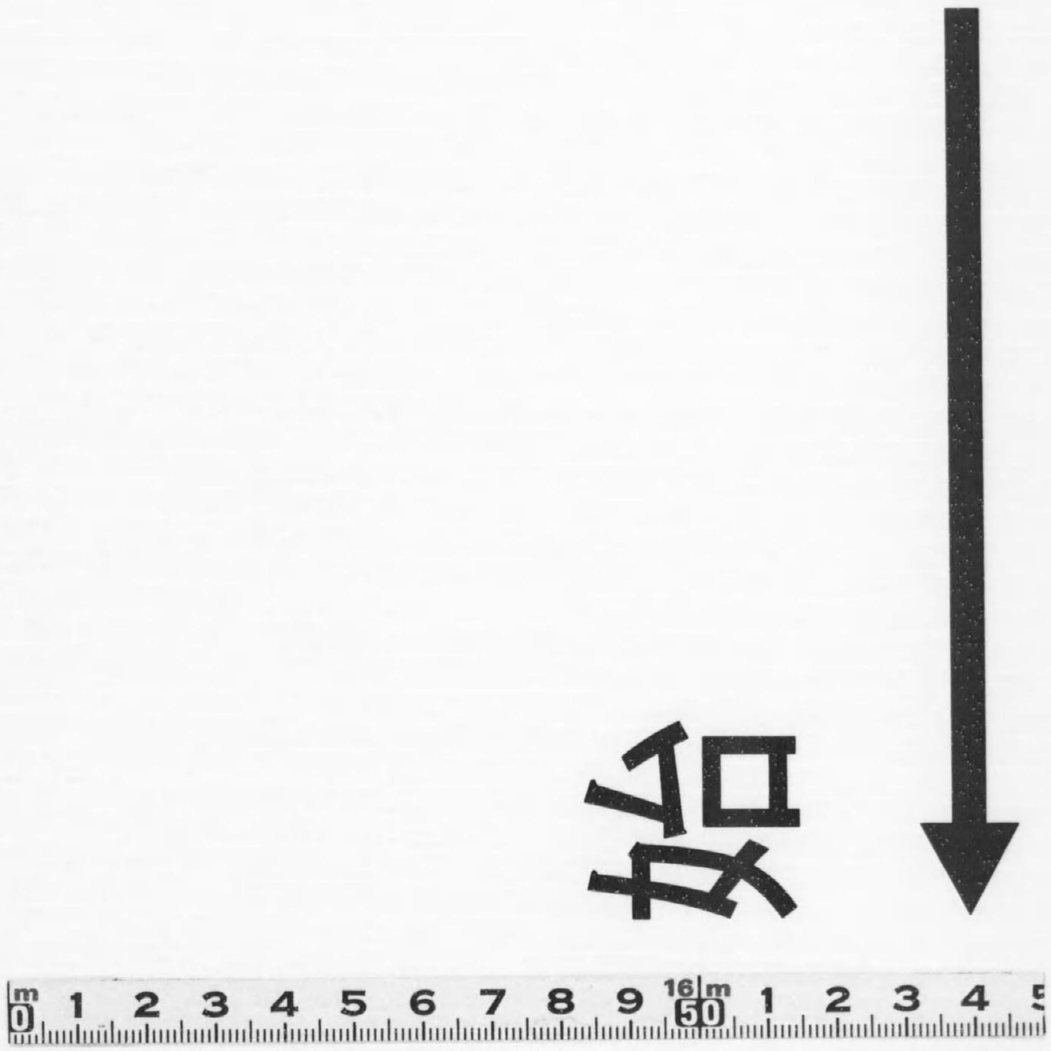

特116
918

特116
918

太靈道全輯稿本

學部門

第貳卷

大正
11. 11. 21
内交

太靈道靈醫學

序

人類生命の神秘は、近代科學の精粹を萃めて、猶、容易に窺知するを許されず。隨て未だ完全適切なる治法を發見するに至らず。是れ洵に、その研究が生命の皮相に止り、その核心に透入せざるが故に非ざるはなし。思ふに、吾人人類は、絶對の靈これが根礎となり、心的機能と物的機能とを發現し、その交乘する所、生命體を構成するに至るものにして、靈に通曉せざる限りは、生命に關する知識の片鱗だに得ること難し。然して、その生命の缺陷によりて生ずる現象、これを疾患といひ、これを創傷といふ。その疾患及び創傷の現象、これ

を目睹して、その何たるを知るは甚だ容易なりと雖も、未だ生命の本體に遡源せざるが故に、生命機能の缺陷が何の意義を爲せるかを知る能はず。況んや、その缺陷を補治し、全的機能を營ましむるが如き消息に至りては、些の與り知る所にあらず。今、この靈醫學を講述する所以は、是等現代科學の知識を綜合するも、何等結論に到達せざりし所の生命の神秘を闡明し、人類生存の一大脅威たる疾患現象を地上より掃蕩せんと欲するに外ならず。

大正十一年十月

著者

太靈道靈醫學目次

總論

第一款　生命と疾患
第二款　疾患と醫術
第三款　物質的醫術
第四款　精神的醫術
第五款　靈的醫術
第六款　靈子療法

各論

第一款　靈子作用と生命體各部との關係
第一項　腦
第二項　脊髓
第三項　骨髓
第四項　臟器
第五項　體組織
第六項　細胞
第七項　神經
第二款　靈子作用と生理現象との關係
第一項　血液
第二項　脈搏
第三項　血壓
第四項　體溫
第五項　呼吸
第六項　官能
第七項　內分泌
第三款　靈子作用と感應の中樞
第一項　眉間
第二項　後頭
第三項　脊髓
第四項　骨髓
第五項　甲狀線

第六項　腹部
第七項　心臓
第四款　癒能と靈能との關係
第一項　自然癒能
第二項　自然癒能と靈能
第三項　現意識靈能
第四項　超意識靈能
第五項　靈子作用の感應現象
第六項　靈子作用の相乗現象
第七項　靈子作用の應用

太靈道靈醫學目次（終）

太靈道靈醫學

總論

疾患には自然癒能が發動す

現代人は、疾患に罹り又は外傷を蒙りたるときは、藥物及び器械を用ふることに依りて癒されんとする。併しそれは誤れる見解であつて、事實靈を除外しては、如何に輕微なる疾患外傷と雖も、決して治癒すべき理はないのである。勿論、藥の服用により又は器械の施用によりて治癒するといふが如きことは全然ないといふのではない。が、それは藥そのものが疾患や外傷を癒したのではなく、藥物の施用によりて自然癒能が治病の上に働くやうになつたが爲めに、治癒するのである。されば、醫術は自然癒能を除いたのでは成立たないことに

靈醫學は凡總醫學の根柢なり

なるのである。如何なる藥物或は如何なる器械があつても、自然癒能がなければその効を現はすことが出來ないのである。然らばその自然癒能なるものは何かといふに、それは靈子の作用である。靈子作用なければ、自然癒能も隨つて發動しない譯である。

故に、醫術の本來からいへば、靈に重きを置いて、藥物器械これに次ぐといふ順序である。要するに、總ての疾患に對して靈の運營が旺盛である限りは、また運營を旺盛にすべき方法を用ふる限りは、その疾患は必ずや癒さるべき筈である。之れに反して藥物器械が整備したといつても靈の運營を缺いてゐるとき、即ち自然癒能の發動がなつたならば疾患も外傷も治癒さるべき理はないのである。然るに、この自然癒能に對して徹底的理解を有せざる現代醫術は誤れるものといふべきであり、これに生命を託して安心してゐる現代人は頗る危險に瀕してゐるものといふべきである。

靈醫學は、人間生命體の本來に反りて、物質精神の外に靈を認め、靈の運營によりて凡べての疾患外傷を治するを以てその職能としてゐるのである。即ち

疾患の原因

靈によりて發現したる生命體の故障は、その本に還りて靈によりて治するのである。今や、靈によりて肉體の異和を治すべき方法は全く措いて顧みられざる所から、この缺陷を救ふべく靈醫學は建設されたのである。いはゞ、靈醫學は汎有醫術の根柢を爲すものである。

第一款　生命と疾患

人類の生命組織に就ての理論を述ぶることは、太靈道人類生命學の範域に屬するからこゝに述べない。が、その生命體が時として疾患に罹ることがある。この現象が何故起るかといふに、畢竟、靈子の內放と外放が調節を逸することに依りて心身の異和を來すのに原因するのである。假令へば、靈子の外放のみあつて、それが精神の一方に偏するときは、靈子の內放が微弱となつて、身體の筋肉臟器等が萎縮して疾患を釀すに至るのである。また靈子の內放のみが盛んで外放これに伴はざれば、精神に故障を生じて細胞の活動遲鈍となるを免れ

ない。要するに吾人の生命體をして常に健全の狀態のもとに置かんとするには適當に靈子の內放及び外放を調順ならしめなければならない。然るに、人間の實生活は常に偏し易きが故に、十全の健康を保つことは殆んど不可能であつて何人も自覺すると自覺せざるとの差こそあれ、多少の疾患を有せざるものはないのである。

現代人の生活狀態を見るに、生存競爭のために狂奔して精神過勞に陷り、靈子の運營狀態は外放に偏することゝなり、その缺陷を補はんとすると雖も、それは靈子の正常狀態にあらざるが故に、遂には神經衰弱に罹ることゝなるのである。之に伴ふてその內放は微弱となるが故に、身體を衰弱せしめ、終生の痼疾を釀すことゝなるのである。またその身體を過勞するときは、內放のみ旺盛となり、その結果全身の機能調節の作用を缺くが故に、これまた疾病の原因となることを免れないのである。要するに內放外放の不平均は疾病の原因であり、これを治癒せしむるには、その內放外放をして調整ならしめなければならないのである。

その他疾病の誘因としては食物の不良、住居の不適、氣候の不順より生ずるものもあり、遺傳より來ることもある。その他千差萬別の事情が錯綜して疾病の誘因となるのであるが、よし之があつたとしても、靈子作用の內放と外放とが常調を逸せざる限りは疾病とはならぬのである。されば以上の諸因が疾病を誘起するのは、要するに靈子作用の內放外放が常調を失ふより來るのである。然し一旦如上の原因によりて疾病に罹つたとすれば、それを整復させなければならない。かの物質的器械にてもそれに狂ひが生じたとすれば、修理の方法を講じなければならぬと同じやうに、疾患は治癒せしめなければならぬ。

第二款　疾患と醫術

疾患に罹る、この場合それを治癒せしめなければならない。この需求を充たす爲めに醫術の要が起るのである。疾患のある所醫術がある。未開の人類にも疾患があつたからには醫術もあつたのである。凡そ人類に種々なる苦痛がある

けれども、病氣ほど苦痛なものはない。で、帝王にしても富豪にしても其權勢やその資財を以て疾患の苦痛より免れることは不可能である。未開人に於ても同樣の苦痛を感じた所から醫術が成立つたものであつて、また疾患は人類のみならず動物にもある。然してその形は變つてゐても醫術の萠芽はあつたと云ひ得る。彼等は實に本能的に醫術を心得てゐるものとも云へる。今、研究の一端として動物の疾患及びその療法に就て考察して見よう。勿論これは例としては極めて幼稚なものであるが、そのうちにさへ特殊の意味が發見せられる所から引照するのである。

動物を見るに、彼等は人間よりも遙かに罹病率が低く、回復が速かであるのは一般に知られてゐる。それは人間のやうに精神活動少きが故に、靈子の外放も亦た隨て少く、靈子の內放は旺盛となる結果として、動物は人類に比して疾患に罹ること少く、罹つても速かに治癒するのである。また動物に醫術の萠芽があるといつたのは、動物が創傷を受けた場合などは、その創傷部を舐つて唾液によりて治癒を計ることが常である。その理由はあとで說明するが、全く唾

液には治病の効があつて、彼等に取りてはそれが唯一の醫術であり、療法である。これが疾患のある所醫術ありと稱する所以である。

更らに原始人類の間にも一種の療法が行はれてゐたのである。彼等は身體に異和があり苦痛があれば、それを押へる。これは現代人に在りても猶行ふ所の方法である。それは單に痛いから苦しいからといつて無意味に押へるのではなく、押へるとその苦痛がやむからである、治るからである。更に撫擦する方法がある。これも原始人類の行つた所の方法であつて、現代人に在りても本能的にそれを行つてゐる。然るに、これによりてその疾患が多くの場合奇妙に癒されるのである。此くの如きは、疾患のある所醫術ありといつたやうな廣い意味からいへば醫術であるが、實は本能と稱すべきものである。

また古代人の間には、病氣は神の意思に反く所から起るものとして恐れられてゐる。現代でも或る一派の宗敎では專らそれを唱へるものがある。これは一見笑ふべき見解に見ゆるけれども、詮じつめればそれは正しい解釋である。神の意思に反くといつては異樣であるが、これを現代的に疾患は生活の自然に反

醫術には文明を促進せる傾向あり

いてゐるから起るのであるといへば、そこに何等の異樣な感をもつ所はないのである。自然の根原を神といへば迷信のやうであるが、絶對といへば少しも不合理な感を起すことがない。絶對即ち太靈である、宇宙萬有は太靈全眞の活現である。その社會生活乃至人類生活が太靈全眞の活現に反くが故に疾患に罹つたのである。靈に反いて疾患に罹つたのであるから、それを治するには靈によりて整復せしめなければならない。古代に於ては、疾患は神に反いた所から起つたものと考へたので、また神によりて癒されんことを求むる。それが適ま靈的治療の原則に協つてゐたので克くその効驗を見たのであるが、世の降るに從つて現代の藥物治療となつたものである。

醫術は未開時代から重んぜられた迹がある。然してまたそれが重んじられた結果として、常に醫術が文明の先驅を爲してゐた傾向がある。如何に卓越した思想信仰があつても、それが反對なしに受容れらるゝことはない。然るに、病氣が治するといふことには反對するものがない。若し病氣が治することが確實なれば、反對することはおろか、これを歡迎するに至るのである。かの秦の始皇が、一切の書を焚いたといふが、醫書だけは焚かなかつた。さう遠い例を引くまでもなく、德川時代に於て外國と交通することを禁じたが、長崎だけは和蘭陀船の碇泊を許したといふのは、彼より醫術が輸入されたからである。

醫術は人類の共同に研究すべきものなり

斯くの如く醫術は昔から深甚の敬意を拂はれたものである。それは民命に對して重大なる關係があるからである。その醫學醫術にして我等の期待を裏切り疾患に對して効果がなかつたとしたならば、人類の不幸如何ばかりなるかを知らない。されば、その効果の確實にしてその療法の純正なるものを發見し、これを人類に奬むるといふことは、我等共同の一大任務であらねばならない。

第三款　物質的醫術

現代の醫術は物質的醫術である。彼等は藥物器械によりて我等生命體に臨みてその疾患の治療を試みんとはする。物質の力に依りて疾患を治せんとするのは、最近百年間の事であつて、物質的科學と相待つて長足の進歩を爲したりと

醫學進み醫術退く

自負してゐる。然して、これは醫學者、醫術家の職能であつて、門外漢には一指をも染めさせまいとする風習がある。この專制的傾向は打破しなければならない。人類の疾患に對してその治療の方法を講ずることは、醫學者、醫術家にのみ任せて置いてはならない。人類といふ人類は總べて起ちて、醫術の何ものであるかを審査し、それを批判しなければならない。

醫學者、醫術家は自ら囚はれてゐて、外界の事物を正當に考ふる力を缺いてゐる。されば、それに就ての正しき觀察、正しき批判は外界より加へられなければならない。吾人は現代醫術に反對せんが爲めに反對する者ではない。前にも述べた如く、人間の生命は物質のみから成立つてゐるものではない。その生命現象の一たる疾患に對して、現代醫術の如く物質のみの力によりて治療を試みんとするのは、果して正しい事であらうか。一般人は須らくその有する批判の能力を働かして見なければならない。

こゝに醫學と醫術といふ二つの語を使つてゐる。この二つの語は嚴格に區別を置いて考へなければならない。かくて、現代物質科學の進歩に伴ふて發達したる現代醫學は非常に發達したと稱することが出來る。然るに、人類生命の上に直接の關係を有する現代醫術は、些の發達をも見ることなしと斷言することを甚だ遺憾とする。昔から不治の難症とせられたる疾患、例へば、不隨症、癲病、肺結核の如き疾患は、醫術の進歩したる今日に於ても等しく不治の疾患である。その他、總ての疾患に對して毫も恃みとするに足らざることは、昔より却つて今日に於て甚しといはなければならない。

現代醫術家は、大學なり專門學校なりを出でゝ、醫師となりて患家に臨む。勿論、學校に於て治病の術は修得したる筈である。然もそれは治病の術として果して効があるや否やといふことは、更らに念頭に置くことなく、無批判のままその修得したる技能を以て患家の治療に從事する。此くの如きは人生上由々しき問題であつて、深く考へれば恐怖戰慄せざるを得ない一大事である。然して、彼等醫術家の治療の實蹟に就て考察するときは、現代醫術によりては、一二を除くの外總ての疾患は殆んど治するものにあらずといふも決して過言ではないのである。かく稱するときは一般人は恐らくは承認せぬであらう。要する

に、世人は現代醫術の眞相を知悉せぬが故である。若し世人にしてその眞相を知悉せんか、その餘りに無能であつたことに驚くであらう。世人は叙上の如く猶現代醫術に對して相當の信を措いてゐるのであるが、醫術家は却つてよく自家の醫術の無能なるを熟知してゐて、我等の無能を叫ぶのをば承認するであらう。然して、彼等の僞らざる告白を聞くときは、確實に有効なりとせらるゝは治病の方面に於ては、マラリアに對するキニーネがあり、豫防的のものとしては種痘があるのに過ぎない。これに次いで稍確實なりとせらるゝのは、ジフテリアに對するジフテリア血精、微毒に對するサルバルサンの注射である。併しこれは一面に効果があるが、他面に副作用ありて、必ずしも理想的の治療法といふことが出來ない。されば、適ま現代醫術によりて奏功した實蹟があつたと見ゆるも、詮じつめれば、それはすべて自然癒能の發動に歸さなければならないのである。

さりながら、現代人と雖も、全く現代醫術に對して盲目なりといふわけでもない、現代醫術の無能なのを知らないのでもない。たゞその疾患に罹つた場合に、何とはなしに醫師に便らなければならないやうな氣がして、醫家の門に走るのである。輕微な神經衰弱に罹つた人に向つて、それが醫術によりて癒されたかと問ふに、必ず否と答へる。否と答へながら彼等は醫師の診療を受けてゐる。その他消化不良の如き胃に於ける些細なる故障に對しても、現代醫術及び藥方が効があつたといふことを聞かない。進んでは、心臟病、肺病、腎臟病、肝臟病、運動器疾患、傴麻質斯、腦貧血、腦充血、腦溢血と數へ來れば、すべて現代醫術に於て直接の効果のあることを認められぬものばかりである。然し病者にして根氣よく醫師の治療を受けてゐれば癒ることがある。これは醫術によりて治つたといふよりも、精神的または日常生活上の關係からして、自然癒能が働いたことによりて治つたのが多いのである。

藥物の効果は信念による

されど醫藥に少しも効果がないといふのではない。或る時は藥物で治ることもある。然しそれによりて甲の病氣が治つたといつても、必ずしも乙の病者に効があるといふことを斷定することは出來ない。要するに、藥物で治ることはあるが絶對的といへないのである。されば、疾患に藥物を施用するといふのは

恰かも富籤を買ふやうなものであつて、効く効かぬといふことは、病者にもわからないが、醫師にも斷定は出來ないのである。通常に於ては、藥そのものゝ効果よりは精神作用によりてこれを左右することが多いのであるといふことは醫師の間にすら信じられてゐる所である。その一例としては、甲醫學者が或る疾患に對して特効藥を發見したとする。と、その反對の側に立つ醫學者は、その特効ありといふのは、藥物よりも寧ろ精神作用の豫期暗示によるものであると、それが共に熱心なる研究の結果であつて、毫も私心を交へざる間に在りても、往々にして交換される論戰の趣旨である。これらも適々醫藥そのものゝ効驗の確實さを裏切ることになるのである。されば同一の處方にしても、それが患者の信頼する醫師と、信頼せざる醫師とによりて、その効果を異にすることは、我等の日常目擊するところの現象である。事實その通り、藥も信念が副はなければその効果を現すに至らないのである。猶藥の効果は絶對的でないまでも、往々効果があつたかの如く考へられるのは、それが藥物の効果に歸すべき場合もあるが、また精神作用、攝生、手當、生活狀態等の種々なる因子により

て現ずることがある。たゞ一つ、それに自然癒能が働かない限りは、現ずるものではないといふことは記憶しなければならない。

然し、靈的治療を標榜して起つ吾人の立場から、妄りに藥物を無効として排斥するのではない。藥物に効果のあることは、或る程度まで認むるのである。吾人は食物の攝取によりて生きてゐる。斷食をしても空氣を呼吸してゐるのである。然るに、これらすべての物質關係を絶つて、靈若くは精神だけで生きてゐようとしても、現在の人類としての生存は不可能といふべきである。かく日常食物が生命體に吸收され、その生存が維持される如く、軈て藥劑を用ひて、生命體の上に特殊の反應を生ずることは認め得るのである。されど、現代醫術に於て用ふるが如き藥物であつては、其有効を認め難いと思ふ。今少し藥學が進歩し、醫術が進みての上の藥物治療であれば吾人は敢てこれを排斥しないのである。思ふに、現代藥學、現代醫術は、往昔の醫藥に比して進歩したるはおろか、寧ろ退歩せりと稱するも敢て過言ではない、醫學の第一義、即ち疾患を癒すといふ點に於ては、世人が草根木皮と稱して、不進歩の藥物を嗤笑する代名詞とす

醫療は局部療法なるべからず

る漢醫藥、漢醫方の方が遙かに合理的であるといふべきである。漢醫方に於ては、現代醫家が診療するが如き輕卒な態度を以て患家に臨んでは居らぬ。現代醫家が疾患に對するや、直ちにその疾患部に對して治療を加へんとする。併し人類生命體に於ける疾患現象なるものは、さう單純なものではない。一つの疾患が起るにしても、時間的に見ればそれに遠因あり、近因あり。空間的にしても全身に調和が失はれた所から、一局部に疾患となつて現れるものがあるかとすれば、またこれと反對に、外傷の如き一部位より全身に異和を及ぼすものもある。何れにしても、全身に渉りて生命機能の活躍を見ない限りは、輕微の疾患と雖も治癒さるべきものではない。これに反して、現代醫家はたゞ一局處の疾患を見るに過ぎない。之が抑も根本の誤謬であるといはなければならない。漢方醫家はその術に於て、その學に於て、一見幼稚とも見ゆるやうであるが彼には古來よりの言傳へがあつて、仁術を標榜して立つてゐる。隨つて彼には誠意の見るべきものがある。その患家に臨むや、仁者の心を以て脈を診し、診療を施したのである。彼の心は春のはじめの太陽の光が地中に及んで草水が萠動

藥物療法は成るべく自然に近きなよしとす

するが如く、病者の身にも心にも浸み透るやうな修養を積んで、始めて名醫となるのである。かゝる名醫があつたとせば、それには確かに靈の發動がある。それだけで何等投藥もしないでも、病者は幾分なりとも癒されなければならない。効果はこれに止まらず、現代人の常として漢醫方の草根木皮を笑ふけれども、その方が精製したる化學的藥品よりも遙かに効果が多いのは事實である。總てのものは、自然の狀態に遠いものゝよりは、近いものゝ方が人間に取りて効果を有するものである。それは吾人の日常生活を見てもわかる。吾人日本人の多くは米を常食としてゐる。現代醫家が疾患に臨む論法からいへば、その米なるものを常食とすることは、徒らに胃腸を過勞せしむることになるのみであるから、米より純粹の精を抽出して榮養分を取つた方が、早く身體に吸收さるゝことゝなる道理である。食物としての理想は、當然かくあらざるべからずといふことになる。然るに、これは我等としても首肯し難い所であると共に、現代醫術者間に於ても、十が十これを是認しては居らぬ。我等の日常の食物としては米の精を抽出するよりもエキスの方がよく、エキスよりはおも湯の方がよく

おも湯よりは粥、粥よりは米飯、米飯にしても白米よりは玄米の方がよいとされてゐる。その理由は、次第に自然に近づくからである。藥物としても草根木皮の方が自然により近い點において、化學的藥品よりも遙かに合理的である。それも一歩進めていふときは、乾燥したる草根木皮を浸劑として用ふるよりは生食した方がよいことになるのである。西洋人の食物はすべての點に於て自然の狀態より遠いところから、自然の要求としてそれに安んずること能はず、果物や野菜を生のまゝ攝取することに努めてゐる。

原始時代に於ては、人類は火を用ふるといふことを知らなかつた。從て烹たり炊いたりすることなく、生のものを生のまゝ食して生活してゐた。その時代の人の壽命を今日の人に比べて見ると、衛生、醫藥凡百の設備が完整してゐる現代人の方が遙かに短命である。その短命の原因としては勿論多々あるべきも生のものを常食とする習慣から離れたといふことも、その重なる原因であるといふべきである。されば、自然の狀態に最も遠い化學的藥品なるものは、製藥術としては非常に進歩したものであり、巧緻なものであるとしても、一たび人體に臨んで疾患を癒さうとすると、進歩はおろか、舊時代よりも非常に退歩したものとなつてゐる。從つて、我等は現代醫術に對して生命を託するといふことは、當に考慮すべきことである。

現代物質的醫術は、疾患に臨んではこの藥物、あの方劑と効果あるが如く吹聽するも、古來不治の難症としたものは、現代に於ても亦不治の難症である。唯だ稍進歩の實蹟の認めらるゝものは理論としての基礎醫學である。即ち解剖生理、病理、細菌學の如きは、若干その進歩を認め得らるゝのである。然るに人類生命體に直接關係ある治療學は、疾患に對しては殆んど恃み難い狀態のものとに在る。

醫界の現狀は實に此くの如くである。疾患に對して、これを癒すべき途を知らない。それは、一般人よりも、寧ろ醫術家自身がよく知つてゐるところである。されば醫術家にしてやゝ氣慨ある者は臨床家たるを鄙み、基礎醫學に對して研鑽を專らにする所より、基礎醫學は益々進み　應用的醫術は日々に退歩することになるのである。

醫家の科を分つ弊

以上は主として內科に就ての觀察ではあるが、更らに外科の方面を一顧するときは、現在に於て長足の進歩を爲したりとせられてゐるが必ずしも然らず。外科的治療に於て、動もすれば刀を下し、鋸を揮ひ、肢を斷ち、腹を開くが如き手術を施すと雖も、結果に於て必ずしも良好なりといふことを保するを得ず。凡ての疾患は全身に相關聯するが故に、一局部の手術によりて萬全の効ありといふことを得ない。併し、吾人は或る程度までその有効を認むるのであるが、疾患の根本原理に觸れざる治術であるが故に、非常に遺憾とする點が多い。然も現代醫學の弊として各々その專門に偏するが故に、外科專門の人は內科の病理に通せず、內科專門の人は外科的療法に就ては無理解なり。その他、曰く精神科、曰く眼科、曰く耳鼻咽喉科、曰く何、曰く何と科を分ち、目を異にするが故に、專門以外は何等通曉する所なく、通曉する所なきを以て、寧ろ一種の誇とするが如き現狀である。

總ての疾患は全身と直ちに相關聯するが故に、甲の病を治すれば乙の病續いて起り、或は甲の病を治することによりて、乙の病に惡影響を及ぼすこともある。然るに、外科的手術を施したる場合、他の內科的疾患を誘發することがあつても、そは自家專門以外の事なりと稱して、更らに責任を自覺することなきは、現代醫術家に於ける通常事である。

現時我が國に於て四萬何千人といふ醫師があるも、醫術に對して深甚なる興味を有し、人の疾患を救ふを以て唯一の樂みとして安んずる人士、果して幾何かある。その多くは職業的觀念に捉はれ、日々の診療に追々として、實際の技能は全く進歩せざることゝなる。これは實際的醫術家に於て見らるゝ大多數の現狀である。更らに理論的研究家の態度を見るに、一意自家の研究にのみ腐心して、その究竟の目的が人類疾患の救濟に在ることを忘れ、それとは殆んど沒交涉の觀をなしてゐる。されば、醫術家は醫學を輕んじ、醫學者は醫術家を輕んずるやうになつて來るのである。

如上の所論、甚しく現代醫術を難ずるが如き傾向のあるのは實に止むを得ざる次第であつて、敢て强ひて非難する爲に非難するのではない。我等は只管人類の健全康强を以て念とする者である。若し世にいさゝかたりとも眞に人類の

健康に寄與する方法があつたとすれば、それを稱揚し、それを推奬するに全力を盡すことを吝まないものである。然るに今我等が現代醫術に對して攻擊の矢を放たざるを得ざるは、その現狀實に坐視するに忍びざるが故である。物質的醫術が物與してよりこゝに五十有餘年、その期間に於て敢て短しといふにあらざれども、進歩の實蹟に徴するに、前途極めて危惧を感ずる次第である。這は實に、現代醫術家が靈に對して全く眠れるが故である。醫術家をして其本來の天職的自覺を生せしむるは、我が太靈道者でなければならない。

第四款　精神的醫術

病は氣からといふ俗諺がある。この俗諺は半面の眞理を有してゐる。凡て疾患の多くは精神より起り、またそれを重くするといふのは頗る注目すべき現象である。さればこれが疾患を治療するとしても、精神によれば幾分かその奏功あるべきことは想像し得られるのである。こゝに精神的醫術の立場もあり主張

疾患と精神との關係

もあるといふ次第である。然るに現代醫術家は動もすればこれに反對せんとする。而してその言ふ所を聞くに、精神的療法は神經系統の疾患に對して幾分の奏功あるべきも、機質的疾患に至りてはその効を見るべきものでないと。これは全く概念に出發して事實を無視したる言議であるといはなければならない。肉體と精神とは常に相關聯して居て、殆んど不可分の關係になつてゐる。機質的疾患が精神に影響するが如く、機能的疾患もまた機質の上に影響を及ぼすものである。機質的疾患には藥物もあり滋養品の攝取があるが如く、機能的疾患に對してもそれに準ずべき何物かゞなくてはならない。即ち慰安または愉悅の觀念の如きはそれである。然して精神的醫術としては決して狹い範圍に限られたるものではなく、かの催眠術、精神療法と稱するものゝ如きは、精神的醫術の一端たるに過ぎないのである。

されば精神的醫術の領域は實に廣漠たるものであつて、現代に於ては最も進歩せざる醫術たるに過ぎない。かの精神病の如きは、物質的醫術よりは寧ろ精神的醫術によりて治療され、その効驗の如きもまた著しかるべきを豫想さるゝ

精神的醫術の領域は廣漠たり

範圍に屬するものである。然るに現在精神的醫術に於てはそれを自家の治療範圍外に置いてある。現在精神的醫術家＝催眠術家にしても精神療法家にしても＝のいふ所によれば、精神的に治癒さるべき患者は相當の辨識力あり注意力ある者にあらざれば之を行ひ難しといふことになつてゐる。また現代物質的醫術に於ては精神病學なる一分科がある。然れどもそれには精神病を治すべき方法が確立して居らぬ。精神病は藥物の力も及ばないものとして、たゞ患者の焦だつ精神を靜め、又は沈む所の心氣を引立たせるといふやうな姑息的補助方法を執るのに過ぎない。然るに最も矛盾したる現象の一としては世に精神病院の設置せられてある事である。精神病院が設立さるゝに際しての先決問題としては先づ精神病の治療法が確立されてゐなければならない。治療法を確立せずして病院を濫設するといふのは、要するに事實精神病を治療するのが目的ではなくその監置所たるに過ぎないのである。

精神病に對する治療法としては、少くとも精神の方面より進まなければならない。然るに物質に囚はれてゐる現代醫學が精神病の治療に臨むといふのは、

現代精神的醫術は未だ幼稚なるを免れず

寧ろ現世代の一喜劇といはなければならない。近時、白痴が教育によりて癒さるゝといふ。それは白痴者に於ては敢て精神機能に於て重大なる缺陷があるといふ次第ではない。たゞその習性に於て缺けたる注意力を喚起すればよいといふ理論から、普通人としての知能を啓發するに至らしむるのである。若し白痴教育が他面に於て完成されなかつたとしたら、現代醫家は臍面もなくその治療に臨んだことであらう。さてこれはその名こそ白痴教育であつたとしても、それは廣義に於ける醫術であつて、見方によれば、精神的醫術の範圍に屬すべきものである。精神病者も或る程度まで注意力を喚起するの手段によりて治癒せしむることを得るものである。精神の誘導によりては單に精神病のみならず總ての疾患に應用して、或る程度までの効果を收め得べきことは十分豫想せられるのである。

さりながら如上の所說は精神的醫術としての理想たるに過ぎない。現代に於ける精神的醫術の發達は催眠術または所謂精神療法の程度のものであつて、病者自身が、精神力を統一し集中し鍛錬せざるべからざるものになつてゐる。さ

れば疾患重態なるに至れば精神も隨つて耗弱してそれを統一鍛錬すべき途がない。また病者がそれを信じなければ寸毫も効果を生ずるものではない。病者に於て精神の鍛錬を要せざるものとしては催眠術の如きものがあるといふ者もあらう。催眠術が或る種の疾患に適用されることはわかつて居る。併しその結果は大率良好なりといふことが出來ない。それは兎も角これら精神的醫術はその大成を將來に期すべきものであつて、現在に於ては猶甚しく不完全の域を脱するに至らないのである。

これに由りて觀るときは現代の人々は病あれども治を託するに途がないといはなければならない狀態のものとにある。

凡總の醫術は靈的醫術に歸納せざるべからず

第五款　靈的醫術

世人は往々にして精神と靈とを同一視する傾向がある。宗教家は靈魂不滅といつて精神と靈とを同一のものとして取扱つてゐる。過去世代に於ては久しく

唯心主義と唯物主義とが思想家哲學者の間に論爭せられた。唯物論者は人間から物質を取除けば何物もない、精神と雖も物質（肉體）より產出したる一種のものであつて、淚腺から淚を分泌し唾腺から唾液を分泌するのと何等擇ぶ所がないといつてゐる。唯心論者に在りては宇宙は心の海である、物質は心の鏡に映る影たるに過ぎない。精神を肉體から取除けば生命はないと主張してゐる。かくて唯心論者と唯物論者とは論爭に日を費したのであつたが、結局結論に到達せずして今日に至るも猶未解決のまゝになつてゐる。

世人は因襲の久しき精神物質を提げて互に爭つてゐたが爲めに、それ以外の天地に出づるに至らなかつた。從つてその間に發達したる醫術としても精神物質を對象としてその療法を研究する物質的醫術と精神的醫術との外は發達しなかつたことは寧ろ當然といふべきである。

然し人類生命體は物質（肉體）からのみ成立つてゐるものではないと共に精神からのみ成立つてゐるものではない。さらば精神物質の二者から成立つてゐるかといふにさうでもない。物質竝びに精神の奥に横つてゐて物質及び精神を

創化したる或るものがある。それはいふまでもなく靈である。靈によりて發現したる肉體と精神と相結合してそこに生命あり靈の發動がある。然してこの生命體には本來疾患といふ現象はないのであるが、その生活の不自然又は遺傳その他諸多の環境の關係よりして疾患を釀生するに至るものである。疾患は靈の發動が正常ならざるに起るものであるから、その末梢たる物質を以てまた精神を以て治癒を圖るといふことは畢竟姑息的療法たるに過ぎないものである。勿論原始時代に於てはその生活が單純にして自然に近きが爲め自ら誰人にも靈の發動が旺盛なる關係からして疾患に罹ること尠く、よし罹つても治癒が遠かなものであつた。然るに世の文化が進むに從つてそれが次第に自然に遠ざかる結果として靈の發動は阻礙せられ疾患に罹ること多く、罹つたとすれば治癒が遲いといふことになる。こゝに於て醫術が發達したが、その醫術なるものが偏性的のものであるが爲めに眞に治癒の効を奏するに至らない。されど世に疾患を治癒すべき方法がない所から勢これに依らざるを得ないことになる。で、その術に對する研究は益々盛んになる。盛んになると共に物質的醫術としてまた精

雖的疾患心的疾患共に靈によらざれば全的治癒なし

神的醫術として偏性的には發達する。發達はするが元來生命の根本に觸れざる療法であるが故に、醫術益々進んで病者益多しといふ皮肉なる現象を生ずるに至るのである。

されば、吾人が疾患に罹らないやうにするには、精神的醫術にも走らず物質的醫術にも依らず、精神物質の根本たる靈の發動をして敏活旺盛ならしむる必要がある。萬一疾患に罹つたとすればまた靈の發動による療法によらなければならない。我が太靈道の目的とする所は絶對を人類生活の上に顯現せんとするのである。其間に靈子療法なるものが完成せられたといふのは、要するに人間生命の本來に即した一運動であるといはなければならない。上來屬次繰返した如く靈は精神物質の本源である。靈によれば精神的疾患も完全に癒さるゝと共に肉體的疾患も癒さるゝのである。水を淨化するには砂で濾過するに如くはない。濁水に注ぐに清水を以てしただけでは容易にその目的は達せらるべきものではない。精神の疾患を癒すに精神を以てし肉體の疾患を癒すに物質を以てしては容易に癒さるべき筈はない。精神物質の疾患は須らく靈の濾過にかけて

淨化し治療するを必要とする。然して靈によりて凡ての疾患に臨むときは初期なれば短時間にして治し、重きも短時日にして完全に治癒せしむるが普通である。勿論それには精神的信念も物質的藥劑も必要とはしないのである。將來人間の疾患を治療し、遂に地上に疾患といふ悲慘なる現象を掃蕩するのは、わが靈的醫術の發達を除いて外に求め得べからざるものと信ずるのである。

第六款　靈子療法

靈子は精神物質の根本であつて、それが人類生命體に發現するに當つては全樞部位を中樞として內放をなしまた外放をなす。內放するときは肉體の榮養をなし外放するときは精神的活動を爲す。その內放と外放とが極めて理想的に發動し、身心に不平均なき場合に於ては疾患なるものはないのである。されば疾患ありたるとき、この靈子作用の發動によれば、容易に然かも完全に治するものであつて、何等藥物又は精神の力をも假る必要はないのである。然してその

効果は殆んど絕對的なものであつて統計を取れば疾患治癒に關しては實に驚くべき數字を示すはいふまでもないことである。然して靈は精神物質の根本なるが故に、精神的研究が深ければ深きほど、物質的研究が進めば進むほど、究竟に於て靈を認めなければならないことになるのは明かである。然るに現代に於ける精神的研究及び物質的研究はその過程に在るが故に未だこゝに到達しないと共に、物質的醫術にしても精神的醫術にしてもまた同樣の觀がある。若し物質的醫術または精神的醫術にして靈的醫術を取り入るゝときは共にそれにより根柢を得ることになるのである。要するに物質は以て物質（肉體）を治することと能はず、精神は以て精神を癒すこと能はざるは現代に於て既知の事となつてゐる。それにも拘らず現代に於て新たなる全的根本的療法が現れざるが爲めに過去の醫術に執著して放棄することに躊躇してゐる傾向がある。されば療法としいへば靈による療法より外にはないことになるのであつて、物質的療法にしても、精神的療法にしても、その實施によりて若干の効果の認められるゝのは間接に靈を應用するの結果であつて、靈の發動なくして如何なる疾患も治癒

すべき道理はないのである。この時に際して靈子療法の提唱あり、またこれを修得して世の疾患救濟に臨むといふのは、驀て地上に都ての疾患といふ現象を掃蕩すべき第一運動であつて、非常に意義深きことゝ信ずるのである。

各論

第一款　靈子作用と生命體各部との關係

第一項　腦

腦に關する研究の必要

人類は腦をもつてゐて、それが人類生命現象の中樞部位となつてゐることは生理學または解剖學に於て朧氣ながらも知られてゐる所である。殊に解剖の結果極めて細微なる部分に至るまでも一々その名稱が附されてゐる。この點からいゝば腦に關する研究は非常に進んでゐる筈であるが、それが形態學として身體各部の中に於て最も詳密なだけであつて、機能學としては殆んどすべてが明

全樞

全樞作能實驗方法

かにされてゐない現狀である。隨つて腦髓中に於て最も必要の器官たる全樞及び胼胝體放線に至りては毫も明かにされてゐないのである。

腦と靈子作用とは極めて微妙なる關係をもつてゐる。然してこれが中樞部位となつてゐるのは全樞である。それは身體に於て中樞部位たるばかりではなく更らに宇宙と人體との橋となつてゐるのである。即ち宇宙靈子が全樞を通じて發動し人類生命を構成するに至るのであつて、全樞は宇宙靈子の働きかけを承けこれを內放するに方りては肉體を榮養し、外放すれば精神活動の因となる。かゝる現象は解剖によりて知り得る所ではないのであつて、解剖によりては幾かにその形狀だけを知り得るのみで、その實體機能といふものは毫も關知する所ではないのである。然してその機能を明かにせんとするには生體に就て實驗するの外はないのである。といつても單なる生理的研究または精神的研究によりてはそれを明かにすることは殆んど不可能である。それを明かにする唯一つの道は靈によるの外はないのである。

全樞が腦の中樞部位たることを實驗するには靈子作用をこの部位に傳ふるときは極めてよくわかるのである。即ち腦に疾患あるに際してこの部位に靈子作用を傳ふるときは見る見るその機能を回復し、疾患の如きは容易に治癒するものである。これは疾患治癒の目的に供用するのであるが更らにより現實の實驗方法がある。靈子作用既體得者があつて全樞部位に向ひ、靈子顯動法または潛動法を傳ふるときは、傳へられたる人の全身に靈動を湧起し來り遂には飛動の狀態に達するものである。これらの實驗は太靈道修靈會に於て施行さるゝが、個人の家庭に於て行つても同樣の現象を呈するものである。

更らに腦貧血または腦充血に罹つた感があるとする。それを試みるには早朝起床後輕く首を振つて見るのである。その時鈍痛があるか或は何となく腦中曇つたやうな感があるとすれば腦に異常のある徵候である。その時患者は眼を閉ぢて自己治療なり他人治療なりの形式によりて潛動を全樞部位に傳ふるときは異常感は直ちに消失するものである。

健腦法としては、それが靈子法體得者であれば腦のうちに顯動を自發せしめ更らに靈子自己療法の敎授に從ひ押法押擦法を頭部に傳ふるときは、腦の活能

益々明晰を加へ疲勞を感ずることがないのである。

全樞の前二脚と眉間との關係

眉間の奥のところ、こゝが人間に取りての急所なることは誰人も知つて居ることである。どうかしてこゝを擊たるゝときは氣絶する。何の故に氣絶するかといふにこの部位には視神經床がある、視神經床には全樞の前二脚が入り込んでゐる。隨つてこゝを擊つときは全樞より發したる靈子の外放線が急劇に遮斷されることになるから氣絶するに至るのである。さればこの部位の感覺は他の部に比して非常に鋭敏なることはいふまでもないことである。試みに人を瞑目させて置いて前額部に凝指すればその人の頭部は自然に動搖を始める、凝指をやむるときは頭部の動搖も靜止する、更らに凝指すればまた動く。即ち頭部の動搖と靜止とは凝指と否とによるといふことになる。

全樞の後二脚と後頭部との關係

次は後頭部である。こゝは全樞の後二脚の先端である。この部位も靈子作用に對する感應は極めて鋭敏ではあるが、前額部ほどの事はないのである。その感應の狀態は前額部と略同じくしてそれの稍微弱のものと見ればよい。

腦に疾患ある人は前額部及び後頭部に靈子作用を傳へ更らに顳顬部にも傳へるがよい。顳顬部は神經と密接な關係がある。前額部、後頭部及び顳顬部に靈子法を傳ふれば、頭腦極めて明快になるものである。自己療法の形式によりて押法及び押擦法を傳へるのである。吾人極めて劇忙なる要務に從ひ腦を過勞することあれば疲勞を感じ易くなる。この時に際して靈子作用を傳ふるときは忽ち回復するものである。

脊髓の微妙なる職能

第二項　脊髓

人體靈子の內放は腦髓にその本源を有し、小腦、延髓、脊髓を經て全身に傳はりこれを榮養することになる。然してそれはまた靈子の外放との相關調和を圖るを以て職能とするものである。これは脊髓痨の患者に就て試みるときはよくわかる事である。即ち脊髓痨患者を直立せしめて置いて、更らに眼を閉づることを命ずる。該患者が命に從つて眼を閉づるときは直立の姿勢を保つこと能はずして直ちに倒れるものである。是は全樞と脊髓との關係を明かに語るものである。眼を開いて居れば全樞の前二脚より外放する所の靈子作用が宇宙精神

と相感應するが故に起立の姿勢を保つことを得ると雖も、眼を閉づるときはその感應が中斷せらるゝと共に、靈子の外放は健康者の如く腦髓を通じて內放と調和が保たれざることゝなるが故に倒るゝのである。

靈應聖試修法に於て、受法者は瞑目してゐてよく施法者の思念に感應して、思念の通りの事を實行して誤なきは人のよく知る所である。それは施法者の思念が受法者に感應して外界と調和が保たれるからである。要するに施法者がよく注意してゐる限りは一尺に足らぬ道幅の處と雖も瞑目したまゝ疾走しても履み外すことなく通過することを得るものである。若し其際施法者が注意を怠るときは受法者は忽ちそれを履み外すものである。

更らに該脊髓患者をして直立して瞑目せしめたまゝ放置するときはその倒れることは必然であるが、これに對しその背後より凝掌法を施すときはよく久しきに堪えて倒れざることを得るものである。又試みに凝掌を休止するときは直ちに倒るゝものである。その理由は指掌より發する靈子作用によりて外界との聯絡が保たるゝが故である。それは恰ど靈應聖試の場合五寸の道幅をも履み外

すことのないのと同じ原理に歸するのである。靈子作用と脊髓との關係はかくの如く極めて密接なものがある。

更らに熱に侵されたる患者があるとする。たとへば間歇熱の患者であつたらそれがよくわかるのである。即ち該患者が將に發熱せんとする時刻に先ちて疾患部に靈子法を施して置くときは發熱せざるが常である。よし多少の發熱を見るとしても非常の低度にあることは、何人が實驗しても容易に證明し得られることである。

骨髓は鋭的感應最も鋭敏なり

第三項　骨髓

骨髓と靈子作用とは脊髓と靈子作用との如く極めて一致したる關係を有してゐる。脊髓に於ける脊髓液の如きものは骨髓に於ても流衍してゐる。それは單に液體とのみ考へられてゐるが、氣體をも爲してゐる。たゞその氣體を爲せる部分は解剖によるもまたその他の實驗によるも發見すること困難なるが故に液體とのみ考へられてゐるのである。然してこの脊髓及び骨髓の內容物は靈子作

用が脊髓若くは骨髓を通じて發動するときはそれに從つて生じまたその導體となるのである。

今これを驗せんとするには、骨組織又は關節に於て疾患ある時に臨みてそれに向つて靈子作用を施すときは容易に治するものである。その方法としては凝指法でも押法でもよいのである。何の故にそれが容易に治癒するかといふに骨組織または關節部に疾患を生ずるのは畢竟骨髓に於ける靈子作用の發動が阻碍され缺陷を生ずる結果なれば、外部より靈子作用を傳達するときは恰もその缺陷を塡充することゝなるが故に容易に治癒するに至るのである。

かの關節僂麻質斯の如きは物質療法にては殆んどその治療法がないといはれてゐるが、これに靈子法を施すときは極めて容易に治癒するものである。若しそれが急性のものであるときは卽坐に治癒するし、慢性であつたとしても極めて容易に治するものである。たゞ靈子作用發動の手掌を以て押へてゐただけで自然に治するものである。併しその病症にしても頑固なものであり極度の慢性となり痛みも感ぜず手足の拗曲してゐるものゝ如きは卽坐に治するといふ譯には行かぬ。卽ち體質が第一の狀態より第二の狀態に移つたものであるから、之に施治するには先づその體質をして第一の狀態に還元せしめなければならぬ。そして怠らず靈子法を施すときは自然に第一の狀態に還るものである。それには局處に押法を加へればよい。すると自然にその部位に痛みを感ずるやうになる。これは第一の狀態に復歸した一證左である。こゝに至ればあとの治療は極めて容易にして拗曲したる手足も自然と舊に復するものである。

骨折脫臼の自然癒合

骨折に靈子法を施用するときはたとへそれが碎けたる骨組織であつても自然に癒合するものである。脫臼に於てもそれに靈子法を施すときは自然に回復するものである。靈子法は總てを自然の狀態に復歸せしむる特性をもつてゐる所から、當然物理的關係によりて整復せらるべきものと考へられたる骨折脫臼の如きすらも自然に整復するに至るのである。

第四項　臟　器

こゝに臟器と稱するのは單に內臟に止らず、人體內部の諸器官を總括してい

甲狀腺

心臟

ふのである。

甲狀腺は人類の精力の源泉を爲すものである。甲狀腺に靈子作用を傳ふるときは著しく若返りの現象を呈し元氣をして極めて旺盛ならしむるものである。生殖器性の神經衰弱を治療するに當りて甲狀腺に靈子法を傳へざるときは治すること甚だ困難である。甲狀腺と性との關係は極めて密接なものがある。男女共に青春期に至れば甲狀腺に於て著しく肥大の度を增して來る。然して甲狀腺より生ずる內分泌は要するに靈の內放より化成せらるゝものである。靈の內放旺盛なれば旺盛なるほど內分泌は盛になると共に、外部より靈子法を傳ふるときは內放と等しくその內分泌を旺盛にするものである。甲狀腺は內臟にはあらざれども、靈子發動の狀態は內臟と酷似してゐる所がある。

更らに心臟に就て觀察するに靈子作用に對する感應極めて著明なるものがある。假りに脈搏結滯の人ありとせんに、心臟部に靈子法を施すときは直ちに整調になるものである。また心臟痲痺を起して危險に瀕する患者ありたる場合、心臟部に最も强き押擦法を施すときは容易に回生せしむることを得るは數多の

胃部

心臟肝臟膀胱等

實驗の證明する所である。また假死者に對しては第一に心臟部に押擦法を施すべきである。かくて假死より救ひ得たる實例は可なり多數に上つてゐる。

胃部に靈子の內放あることによりてよく食物に對して消化吸收の作用を營むのである。然して斷食によりて靈子作用の發動旺盛敏活を致すは反證的に靈子と胃との關係を語るものである。即ち胃に運營する所の靈子作用が斷食によりてその必要なきことゝなるが故に、全身に流溢して體より外發することゝなるのである。

其他肺の如き、心臟の如き、肝臟の如き、脾臟、腎臟の如き、また膀胱の如き、何れも靈子作用と密接の關係 有せざるはない。が、如上の所說を理解するに於ては他を類推するに左まで困難ならずと信ずるが故に之れを略す。

第五項 體組織

體組織は筋肉、皮膚、毛髮、爪牙の如きを總稱するのである。靈子作用を筋肉に傳ふるときは忽ちその効果を現すものである。筋肉僂麻質斯の如きは醫術

に於ては治癒せしむるに方法なきものとせられてゐる。然るに靈子法に依るときは容易に治癒すべきものである。

皮膚

皮膚の如きはその部分が外部に露出してゐるだけ靈子作用を傳へ易い狀態にある。即ち皮膚病の如き腫物の如きは驚くべきほど奇効を奏するものである。

毛髮

毛髮の如きも皮膚と同じく靈子作用を施すときは目に見えたる奏功あるものである。髮の毛を白くしまた黑くすることは從來に於て人力の及ぶ能はざる譬喩として用ゐられたものである。然るに頭髮に對し靈子法を施用するときは、白髮をしてよく黑色に復らしむるものである。然してその實例は澤山ある。効果はそれのみならず高年の爲め脫落したる頭髮をして更らに生せしめ且つ黑からしめた實例も有してゐる。

齒牙

齒牙に在りてもその發生の遲きものに對して施法するは容易に發生するに至らしむるものである。要するに靈子作用は生命機能の源泉なるが故に、これを施用するときは各部の機能をして旺盛ならしむるを以て自然こゝに至り得るものである。

細胞と靈子作用との關係

第六項　細胞

醫學又は生理學の結論としては人體は細胞より成り、細胞の組織によりて腦ともなり。內臟ともなり、筋肉ともなり、皮膚ともなり、その狀態を變ずといはれてゐる。然らばその細胞なるものは何かといふに茫乎として答ふる所を知らない實狀のもとにある。乍併細胞の機能は靈子であることを知らねばならぬ。現代科學者のいふ所によれば細胞は各個體に生命機能を有す。然して細胞の活能旺盛なるときはそれによりて組織せられたる人體も健康であると考へられてゐる、これは允當の見である。されどそれと反對に人體が不健康なる場合に細胞の活能をして旺盛ならしめよくこれを治癒せしむることを得るやといふに、その方法はないのである。然るにこれに對して靈子法を施すときは吾人の疾患は容易に治癒するのである。凡ての施法即ち遠隔施法にせよ、直接施法にせよ施法に當つては生命體を組成する細胞に對して作用を傳へなければならぬ。一切の體組織は細胞によりて構成せらるゝのであり、細胞の根柢を爲すものは靈

子である。

凡ての顫動作用は髓を通じて起るものである。されば靈子作用を脊髓部または骨髓部に向つて傳ふるときは忽ちにして顫動を誘起するに至るものである。

顫動作用は髓を通じて發動す

髓の中心は氣體、液體、固體より成立つてゐて髓液體氣によりて盈たされてゐる。この髓液に靈子作用を傳ふるは靈子作用を各部に傳達することになるのである。されば顫動法は一見靈子の外發に似たるも深く骨髓の内面より發するものである。施法者が靈子作用を他人に傳ふる場合、單に手を按いたゞけにて受法者の身體に猛烈なる顫動が起ることがある。それは皮膚に傳へたるに止るが如き觀あるも、髓を通じて發動するものである。

潛動作用は細胞を介して發動す

更らに潛動作用は何を介して發動するかといふに、それは細胞を通じて發動するのである。靈子板を押へると手掌は少しも動かさゞる程度に輕く置くのであるが、暫時にして前進を始める。それは細胞を通じて微妙なる發動を爲すによるのである。靈子作用が細胞に働きかけ、細胞は同一の方向に齊一の運動を起すからである。青年時代はこの細胞の機能が最も旺盛であるが、老境に及べば自然に衰弱する。それは單に細胞そのものが老衰するといふよりは靈子作用の發動が鈍くなる結果である。若しその衰へたる細胞に對して靈子作用を傳ふるときはその活動は自然に旺盛になつて或る程度までの若返りを爲すに至るものである。老人が青年の間に伍してゐるときは自然と若くなるものである。それは青年の細胞のうちに活動する所の靈子作用が外發してその周圍に瀰漫する結果である。殊に青年者が多ければ多いほどその効果は著しいことになる。猶これは靈子施法を行つて實驗することではあるが、施法の際患者が多ければ多いほど治癒は早いことになる。これは靈子の相乘作用に依るのであつて、その効果はたゞ人數によりて增加するばかりでなく、患者の數の相乘冪として自乘することゝなるのである。

第七項　神經

人體の皮膚の一局部に些細の刺戟を加ふるとしても直ちに痛いとか痒いとかいふことを感ずるものである。その解說としては知覺神經が分布されてゐるか

らだといふ。然してこの知覺神經は皮膚に分布されてゐるが筋肉には分布されてゐない。從つて皮膚を刺傷するときは痛みを感ずるが、筋肉を刺傷したのではそれを感ずることがない。それは外部より受くる危險に對して警告を與ふべく備へられたものである。さりながら假令神經が存在してゐてもそれが痲痺してゐては痛痒を感ずることはないものである。何の故に感せぬかといふに、それには靈子作用が及ばないからである。例へばこゝに顏面神經痲痺に罹つた人があつて顏面には些の感覺もないとする。その痲痺せる部位に對して靈子法を施すときは幾何もなくして痛痒を感ずるやうになる。これは畢竟神經なるものの知覺は靈子作用なることを實證するものである。

更らにこれと反對の事を行ふことも出來る。先づ皮膚に靈子法を施して置いてそれに針を透刺するとする。その時には毫も痛みを感ずることがない。これは一見痲痺の狀態と見ゆるやうであるが、事實はさうではない。痲痺の場合には於ては局處に缺陷が生じてゐるが故に、靈子法の施用によつて健全なる神經分布狀態に復するのであるが、その部が既でに健康であるとすると、その上へも

つて來て靈子法を應用するが故に、それだけ靈子作用の餘剩を生ずるに至る。その部分に向つて刺傷を加ふるときは、靈子作用は急激にこれを健康狀態に回復せしむる上に働くを以て、刺傷以前の狀態を維持するが故に痛みを感せざることを得るのである。

現今一部の心理學者の間に用ゐらるゝ所の情緒測定器がある。これは元來情緒を測定する爲めに造られたるものであるが、その測定器を人體に裝置してをいて試驗者が何等の豫告もなしに急劇に光れる針の尖頭を以て皮膚を突き刺さんとする姿勢を擬するときは、情緒に激しき衝動を感じてその測定器の示度の上に變化を現すものである。更らに徐ろにその針を示して刺傷するときは却つてその示度は低くなる。これが二返三返と繰返さるゝと段々にその示度は低くなるといはれてゐる。これはもと情緒を測定する爲めに造られたものであるから今いふ知覺神經の場合と同一に見ることは出來ないが、刺傷を二返三返と繰返すと順次示度が低くなるといふのは一面情緒の動搖が刺傷に馴れて安定を得るに歸すべきも、同一部位に同一刺戟を繰返すと痛みを感ずる度の低下するこ

とも事實である。これはその部位に於て急激なる靈子の發動が旺盛になるの致す所である。然るに若し靈子の發動よりも受くる所の刺衝がより大なるときは痛みを減ずるはおろか漸次にそれを增大するに至るものである。然してかの情緒といふが如きも一種の靈子の流れであつて神經に於ける痛痒の感は靈子の內放に伴ふて外放が誘發されたものであり、情緒の如きは靈子の外放に伴ふて內放が誘發されたものであるといひ得るのである。

以上は主として知覺神經に就いて說いたものであるが、その他の神經組織にしても、同一現象であつて、一面に於ては防護機關となると共に、他面に於ては運動機關ともなり以て環境に適應して種族保持の任務を負擔し、生存上の前衛となつて今日に至つたものである。されば神經そのものゝ分布の狀態并びにその感受の狀態に就て深く觀察するときは、そこに過去計るべからざる年代に於ける人類の發生並びに發達の歷史が記錄されてある。この細微なる神經のうちに、この事蹟を讀むといふ事實に當面するに於て、我等は深く深く、靈の攝理の尊さに驚くものである。

赤血球と白血球

第二款　靈子作用と生命現象との關係

第一項　血液

生命體の組織と靈子作用との關係は非常に複雜になつてゐる。血液のうちに赤血球と白血球とを見出すことが出來る。今血液、血球及び靈子作用の關係に就て說明することにする。

血球は、生命體のうちに存在するときと外部へ抽出したときとは、その狀態もその成分も全　異つたものとなる。殊に血球と靈子作用との關係を研究せんとするには、生命體のうちに存在するものにあらざれば、殆んど沒交涉のものである。勿論、體外へ取出した血液及び血球にても、或る時間は相當に生命機能を有するが故に、これに靈子作用を應用するときは幾分の變化を見ないもの

精神作用と血液との關係

でもない。今これらの事項に就て實驗の結果を述べて見よう。

全極部位より發動する靈子外放線は精神作用となりて發現する。それが心臟の活動と密接の關係を有し、また血液の成分の上に著大なる變化を齎らすことになる。即ち、吾人々類が憤怒したる場合は面色に紅を潮し、また恐怖を感じたるときは面色蒼白となりて、何れもよゝその內面に動く所の感情を表出するものである。畢竟するに、これは白血球と赤血球との間に變調を生じたる結果である。憤怒を感ずるとき面色潮紅するのは、赤血球の活動が旺盛になつたが爲めで、これと同時に筋肉にふるへを生ずるものである。また悲哀を感じたるとき、或は恐怖を感じたるとき面色が蒼白になるのは、赤血球の活動が沈滯して白血球の活動が增加する、この時も前の憤怒の場合と同じくふるへまたはその他の異常の筋感を生ずる。これらはすべて靈子作用がその偏したる赤血球、或は白血球の活動を調節せんとして起る現象である。殊に甚しく悲哀を感じ、或は恐怖を感じたるときは、脊髓部に水をかけられたるが如き冷感を生ずることがある。これは赤血球が甚しく微弱となり、これに反して　血球が旺盛にな

血液と遺傳の關係

つた結果である。その不調和を調和する爲め靈子作用が極めて旺盛に發動するので甚しきふるへを生ずるに至るのである。

更らに遺傳と血液との關係に就て考察することゝしやう。血統が正しいとか正しくないとかは世俗にいふことであるが、これは最もよく事實に適合してゐる。遺傳の關係は大部分に於て血液によるものである。その血液は成るべく異りたる種類のものが混和されることに於て補整が行はれるのである。近親結婚に於てはその補整の行はれる機會が極めて少くなるので、往々にして不良の結果を見る。但し近親結婚必ずしも不良なりとは限らない。男女兩者の體質が理想に近き健全なるものであつたとすれば、換言すれば男女の各々がその身體に於て均齊を得てゐるものであつたとすれば、子々孫々に益々その優良なる體質を發達せしめ、殆んど倫を絕したる結果を見るに至るべきである。たゞ事實として、かくの如き體質を有する者は極めて稀なるが故、近親結婚には危險が多いと見做され、又多くの場合體質心質に於て劣弱者を生ずるのは事實である。それは近親者は相互相近似したる血液を有するが故に、善き方面にせよ、惡し

き方面にせよ、血液中に含有せらるゝ特質が相乘せられて、最も强烈に發現するが故に、その特性が著しく現るゝことになるのである。然して、それが善きにあれ、惡しきにあれ、偏して發現するが故に、全體に於て權衡を失ふ所より大率不良の結果を見るのである。かの癩病の如きは、近親間の結婚より生ずるものと考へられてゐる。要するに、近親者間の結婚は、極めて稀なる場合に限つて良き結果を見るも、多くは血液をして惡變せしめ、やがて全體に及ぼして忌むべき體質を遺傳することになるのである。然しながら、遺傳せられたる惡き體質と雖も、靈子施法に依るときは或る程度まで矯正變化せしむることは可能である。今も稱する癩病の如きは、現代醫學に於ては、何等これを治癒せしむべき方法はないとせられてゐる。我が靈子治病施法としては、よく血液をして調和せしむるの靈能を有するが故に、その發病後に於ては、よくこれを全治せしめ、またその未だ發病せざる際なれば、猶更以てこれを豫防することは容易である。

疾患と脈搏の關係

情緒と脈搏の關係

第二項　脈搏

我等が疾患に罹つたときには、診斷の必須條件としては、脈搏を檢することである。脈搏は身體及び精神に於ける狀態に對して、最も敏速にその影響を現すものである。普通壯年者の脈搏は七十內外である。然して幼年時に於ては多く、老年になるに從つて少くなるのが通則である。また睡眠時に於ては、覺醒時に比較してよほど少くなる。更らに深き聖默狀態に入るときは、その脈搏極めて沈靜して、その身體に故障なき限りは四十以下三十至位に下降し、普通より三十至以上を減ずるのが常である。

また感情が興奮したるときは、脈搏が速くなる。それが憤怒にもせよ、驚愕または恐怖にもせよ、著しく感情が昂進したるときは、赤血球と白血球の比例が破れ、何れの一方かに偏して旺盛になるが故に、一面これを補正すると共に他面に於ては急激に昂進したる感情は、往々に體內に毒素を發生するが故に、それを解消すべく、靈子作用が急激に發動する。爲めに、それが脈搏に及ぼし

異常の速脈となるのである。疾病時に於て、脈搏が速くなるのもこれと同一理由に本づくのである。但し、速脈は必ずしも靈子作用の反動とは限らず、病的現象として見るべき場合もある。かゝる場合は、心臟部に押法を施せば、よくその脈搏をして正常に歸せしむることを得るものである。

第三項　血壓

血壓に就ては、從來に於てこれが定說はないのである。普通には、血壓が異常に高いのは稍危險なりと見做されてゐるが、事實必ずしもさうではないのである。然して、血壓の高低は一にその人の體質によるものであつて、その人々に就てこれが高低を論ずべきものである。世に血壓の理想的標準を百ミリと算定して、これに近ければ近いほど健康なるものと稱する醫家がある。血壓は、叙上の如く其標準を其人々に置くべきものであつて、人類全體を通じて何ミリが理想的標準なりと定め得べきものではない。猶靈醫學上より觀察するときは寧ろ如上の所說と反對の現象を生ずるのである。即ち、靈的修法の後は、却つて血壓をして昂昇せしめ、所謂理想的標準よりも高からしむるものである。要するに、血壓は身體各部の相對關係に於て生ずる現象であつて、これに絕對的意義を認めんとすることは出來難いのである。

血壓には絕對的の意義なし

第四項　體溫

體溫の昇降現象

體溫は、普通脈搏と比例して昇降するものである。脈搏が多いときは體溫も上昇するも、少いときは體溫も共に下降するものである。然るに、これと反對に、脈搏少くして體溫が上昇することがあり、また脈搏が多くて體溫が低下することがある。かくの如き徵候ありたるときは、直ちに危險に瀕せるものと見做して、適應の措置を執ることが必要である。體溫が甚しく高ければ、醫術上の處置としてはこれを下げることになつてゐる。勿論、それは必ずしも非認すべき方法ではない。即ち單なる應急手段としての處置であれば差支なきも、その心得なくして徒らに解熱せしむるといふことは宜しくない。熱は、自然癒能力の一現象として上昇するものであるが故に、その疾患だに治癒に就くときは

自らにして解熱するものである。然るに、不自然なる藥物またはその他の處置によりて解熱せしむるといふことは、生命體の上に危害を生ずるものである。たとへば、感冒の際に不自然に解熱せしむるときは、肺炎となつて危險を釀すことは常に目擊する所である。かの二三年前猖獗を極めた流行性感冒は、その原因未だ決定せらるゝに至らざる爲め、當時に於て適當の治を施すこと能はずして、肺炎を併發して死亡した人が甚だ多かつた。これが爲めに、多くの醫家は流感の原因を肺炎菌によるものと考へたやうであつたが、靈醫學上より見るときはそは決して肺炎菌にあらずして、不自然に體溫を下降せしめた爲めである。何の故に藥物またはその他の方法によりて不自然に解熱せしめたるときは肺炎を發するかといふに、藥物等の施用によりて、身體各部に渉り體溫を低下せしむることは、或る程度まで自由であるが、獨り肺に至りてはそれが甚だ困難である。といふのは、身體各部に在りては、靜止の狀態を保つことを得るも肺に限りてそれが困難にして、肺をして靜止の狀態を保たしめんとするには、呼吸を閉塞するの外はないのである。呼吸を閉塞することは生理上全然不可能

體溫は機能調整の機關

の事であるから、肺をして靜止せしむるといふことは從つて不可能なのである。されば藥物等の施用と全身に渉れる靜止と相待ちて、解熱することを得るとしても、肺ばかりは靜止の機會なきが故に、依然熱の上昇を續けること、なるのである。かくて、全體に渉りて熱のある時にても堪へ難き所へもつて來て、肺のみが高熱を保つが故に、全體の體溫の均衡が破られ、遂に肺炎に變症して不幸の轉歸を取るに至るのである。されば、不自然に熱を下げるといふことは、疾患に際して決して用ふべき方法ではないのである。

要するに、體溫は全體の機能を調整するために高くもなり、低くもなるのである。されば高熱を持續するとしても、驚いて藥物を用ひて解熱を圖つてはならぬ。須らくその熱の高まる原因からして治さなければいかぬ。例へば流感の如きは、盛んに發汗せしむることが何よりもいゝのである。その手段としてはいくらもあるが、靈子法なれば、顯動修法を極微細に行ふがよいのである。發熱は靈子作用が內放した結果であるが、顯動を行ふて、盛んに熱をして外放せしむるときは發汗によりて解熱し、容易に全癒せしむるものである。

第五項　官能

孰れの官能も靈子作用と關係を有せざるなきは勿論の事である。視官にしても、見えるといふことは、眼があるからといふばかりではなく、そこに靈子作用の發動があるから見えるのである。また視るといふことは、必ずしも肉眼や視神經があるからではないので、それらの器官を缺如してゐる場合でも、猶よく視るといふ働を營むことが出來る。例せば、視力を司どる器官を缺いてゐるとしても、透視、遠隔視といふが如き、超常的視覺を發現することが出來る。これらは努めて靈的修養を積むときは、さしたる困難もなくこの能力を發現するに至るのである。然してまた、普通肉眼を通じて見るとすれば、すべて光線の力を假りなければならない。若しそれが靈子作用の特殊發動による超常的視覺によるときは、暗夜に然かも眼を閉ぢて居つても、猶よく視ることを得るのである。何故、これらの事が爲し得るかといふに、全樞による靈子の外放によりて感識するのである。

聽官の音響に於けるは、單に耳といふ器官があるから聞くことが出來るといふばかりではない。特にそこに靈子作用の發動があるからである。若し心が他の事物に集中されてゐたとすれば、耳の聽道、鼓膜、中耳、內耳等の各部位に於て些の異常がなくとも、聞くことを得ないのである。言はゞ他に集中されてゐる注意にうち勝つほどの物音或は音聲によりて、これを驚覺しない限りは、如何なる事を話しかけても、更らに聽取らないことがある。これは、精神の集中されてゐる部分に、靈子の外放が旺盛となつてゐるが爲めに、聽覺の方に於ける働が稀薄になつた爲めである。これに反して、聽覺を司どる器官が疾患または外傷によりて損はれたとしても、靈子作用を施用すれば、聽力從つて旺盛となり、遂にはこれを回復するに至るものである。然して、聽力の回復そのものは靈子作用の旺盛に運營せらるゝ結果として、損はれたる器官も完全なる狀態に回復するものである。例せば、久しき以前鼓膜を損傷したる爲め聽力を失ひ、靈子施法を受けつゝある間に、鼓膜が新生したりといふが如き奇効を奏することは、靈子施法家としては寧ろ通常事に屬してゐる。

嗅官の如きも、靈子の發動によりてその働きを爲すのである。人類は火食する爲めに、嗅覺は自然に退嬰すると共に、我等が今日の如き文化生活を營むことが、嗅官をして甚だしく鈍痲せしむる原因となるのである。我等が短時日の間にても森林に入り、原始的生活を爲すときは、嗅覺は著しく鋭敏になるものである。これによりて觀るも、嗅覺そのものは、靈子の發動なることを認め得るのである。殊に予自身が惠那山中に於ける斷食修養の經驗によるも、數町先の山の岨を走りつゝある動物の何たるを、嗅覺によりて辨知したるが如き事實がある。通例、嗅覺は如何に訓練して鋭敏ならしむと雖も、數町先の幽微なる臭氣を覺知し得る筈はないのである。然もそれを知り得るといふのは一に斷食時に於ける靈子の外放の敏活旺盛なるに歸すべきものである。これと共に、鼻疾患の爲めに嗅覺を失ひたる人の如きは、靈子法の施用によりて、鼻疾患を治癒せしむると共に、嗅覺を回復せしむるに至るものである。

味官、即ち口腔、齒牙及び舌筋等に亙りて靈子作用の發動があつて、始めて味覺の用を爲すのである。この部位は、人體を養ふ門戸なるが故に、特に靈子の發動も旺盛なのである。然して、その味覺を生せしむる上に、最も必要なるは唾液である。この唾液なるものは、靈子の發動によりて唾腺より分泌するものであるが故に、唾液中にも靈子能が多量に含まれてゐる。古人は知らず識らずのうちにこの理を體得してゐたと見え、道家或は我が國の神道家のうちには單に唾液の塗布によりて、諸種の疾患を治療する人がある。猶、基督が盲人の眼に唾を塗りて、その明を回復せしめた有名な話もある。また動物が創傷したとき、頻りにその部位を舐めてこれを癒しつゝあるが如きも、人のよく目擊する所のものである。かくの如きはすべて、唾液中に靈子能を含有することの一證左となすべきである。更らにまた、我等が有毒の食物を攝取せんとしたる場合の如きは、唾液が先づこれに作用することによりて、味官をして甚だしき厭惡の感を生せしめ、これを吐出することゝなつて、その中毒を免るゝことは、往々にして經驗する所なると共に、諸多の動物に於ても認め得る所である。然も唾液は靈子の發動によりて、創化造出さるゝものであつて、假令、久しく水分を攝取せずして渴を訴ふるときにも、よく唾液は分泌さるゝものである。行

軍中に於て、士卒が渇して水を飲まんと欲するも、附近に於てこれを得難きに際し、引率者の機智によりて梅子の酸を想像せしめ、容易に唾液を分泌しその嚥下によりて一時の渇を救ひたることは、人口に膾炙されてゐる所である。これらの事實によりても、唾液と靈子能とは密接な影響があり、更らに味官ともに關係があることが知り得らるゝのである。

觸覺は、他の感覺と等しく、靈子作用が發動してゐるために、その感覺を生ずるのである。然して、全身の皮膚に渉りてその發動を見、微細なる物體が觸れても、よくこれを感知し得るのである。若しその發動なからんか、何ものをも感知することなきに至るのである。されどかの靈子刺針法に於て、針又は三ツ目錐の如き物體を貫刺するに先ちて、靈子作用を施して置くときは、その痛みを感せざるは、一面神經の分布するは皮膚の表面に止り、内部の筋肉にはこれなきが爲めなりと解せんとする者がある。かくては、突き破られたる表面だけなりと微痛を感ずる筈なれども、毫末もこの感なきは、靈子作用の急激なる發動によりて、皮膚をして無傷狀態に變化せしむる爲めにして、痛感の鈍痳とは別の關係に在ると共に、物質的には依然皮膚に針痕を遺すも、獨りその感覺のみは健康狀態と異ることなきは、一に靈子の發動の効果に歸すべきものである。かくて、その傷痕の如きも極めて急速に回復するに至るべきものである。要するに靈子作用は觸感をして鋭敏ならしめ、また病的に或は外傷的に損傷せらるゝときは、健康狀態に回復せしむる作能を有するものである。

精力と内分泌との關係

第六項　内分泌

人間の精力が内分泌によりて左右されることは、何人も周知の事である。その中樞として目さるべきものは甲狀腺である。但し甲狀腺のみが内分泌を行ふのではないが、内分泌のすべてに就きて解説せんとせば、寧ろ一科の學を爲すに足るほどであるから、爰には人類の健康、生殖、生命等の上に、重大且つ密接の關係を齎らす所の甲狀腺に就て略述する程度に止めて置く。人間に生殖能の發達するのは、ホルモンの關係によるのであつて、それが全身に增殖し來るに從つて、生殖能もまた旺盛になるのである。それと共に、身體各部の催情帶

に於ける感覺が鋭敏になつて來て、些の刺戟によるも、生殖慾を誘發することになるのである。催情帶といふのは、唇、乳、手掌等を稱するのであつて、この部位に、何等かの外來の刺戟あるときは、一種の快美感を生じ、生殖器に感應し、催情の誘因となるものである。それと共に、催情帶の各部位には、ホルモンの分布最も饒多にして、隨つて、靈子作用が最も多く流衍してゐるのである。即ち唇は生命保續の消食器の門戸であり、乳は女性に在りては兒孫を哺育するの器官として、生殖器に數へられてある。手掌は物體把握を以て能として原人時代に於ては生活の第一線に立つべき武器として用ゐられたのであつて、今日文化生活を爲すに至るも、猶重要器官たるの價値を失はないのである。されば、これら何れの部位に於ても、特に多量に靈子作用の發動があつて、自他の生命體を養ふの用に供されてゐる。猶、靈子作用を誘發するに際しては、合掌の形式を執り、手掌面に力を單めて靈子作用を發動せしむる如きもこの部位に、最も饒かに靈子作用が流衍してゐるが故である。然して、この精力の本源要素たる內分泌を、層一層增生せしめんとせば、顯動作用を誘發せる手掌を以て、頸部の甲狀腺部位に押法又は靜かなる押擦法を施すときは、內分泌は著しく催進されて、生命體全體に涉る機能をして活躍旺盛ならしむるものである。然かもその內分泌はかくの如く人體に取りて至貴至重なものであると共に、靈子作用を傳ふるときはその發生を催進し得ると雖も、これを濫費することは禁じなければならない。即ち、餘りに多く精神を勞するとか、又は性交を妄りにするが如きは、直ちにホルモンそのものゝ放出を意味せざれども、漸次に寧ろ際立てその減退を來すが故に、これを愼むべきである。勿論、懷春期に至りてホルモンの增殖することは、生殖を營むべき自然の攝理に相違なければ、その時期に臨みて、適宜性交を營み、生殖の職能を遂行することは敢て禁ずべきにあらずと雖も、只管健康長壽を欲せば絕對の禁慾を以て理想とする。が、これは敢て太靈道に於て奬勵する所ではないのである。要はかの高僧の如き、全然性交を禁絕したる人々の健康長壽なるは、蓋しこの理由によるのである。但し性交或は精神の過勞によりて甲狀腺の內分泌の減退を來したる感あるときは、須らく甲狀腺部位に靈子法を施用すべきである。

眉間の敏感性

第三款　靈子作用と感應の中樞

第一項　眉間

眉間は、實に面上に於ける眞點とも稱すべきものである。手掌に於て中指の第一節より手掌の中心に向ひ、約五分程距たりたる部位を眞點といひ、靈子作用發動の中樞部位とする。眉間は面上に於て之に相當すべき重要部位である。然かもその價値は、手掌の眞點よりも數等の上に在ることを知らなければならない。靈的修養なき人々の肉眼には映せざれども、この部位からは、常に靈光となつて靈子線を放射してゐるのである。それは、眉間の部位に全樞の前二脚が內在するところから、そこより外放せられるものにして、腹力を充實するときは、一層著しき靈光を放つに至るのである。されば靈光を觀るに習熟したる人に在りては、靈光によりて、對者の腹力の虛實を知り得る次第である。眉間には、かくの如く常に靈光を發出しつゝあると共に、靈に對する感覺は著しく鋭敏であることも忘れてはならない。試みに、自分は眼を閉ぢてゐて、他の靈能者をして眉間に凝指法を施さしむるときは、その箇所に一種の搖搦感を生じ或は電氣に感ずるが如く、或は溫く、或は强き異樣の刺戟を感じ、その人によりまた時によりて一樣ならざるも、極めて鋭敏に靈子作用に感應するものである。されば、疾患者に對して、靈子施法を行ふときは、先づこの部位に凝指法を施すことを忘れてはならない。

第二項　後頭

後頭は小腦部であつて、全樞の後二脚が內在してゐる。されば この部位に作用を傳ふるときは、本人はそれを覺知せざれども、よく顯動を誘發するものである。治病施法において、靈子作用をこの部位に傳ふるときは、靈子の內放が旺盛になる結果として、自然癒能の著しき發動を見るに至る。されば靈子施法家たるものが患家に臨むときは、反覆してこの部位に靈法を行ふることを要す

るのである。

第三項　脊髓

霊子作用は、脊髓を通じて全身に流衍するが故に、この部に霊法を傳ふるときは、全身に猛烈なる顫動を發現するものである。されば、霊子施法を行ふに當りても、後頭部に接する部位より順次に下りて、脊髓部に霊法を施さなければならない。霊法を傳へるには、叙上の如く上より下に及ぼすを順序とす。それは人體霊子流衍の方向に沿ふて施すためである。例せば、一個の主流があつて、それに對して他の流れを導き入れるが如くで、その流衍の方向と反對に行つたのでは意義を爲さないことになるのである。かくて、脊髓より全身に分布する霊子作能をして、旺盛敏活ならしむるのである。

第四項　骨髓

骨髓は脊髓と等しく、霊子の流衍が極めて饒かに行はれてゐるのである。人間が疾患に罹るか或は老衰するときは、この部位に於ける霊子の流衍が極めて稀薄になるのを免れない。されば、一面その霊子能を附加する意味に於て、霊法を施すのである。此場合に於ても、霊法は、腦を本源として、肉體の末梢部に向つて、順に傳へなければならない。かのマッサージ等に於て行ふが如く、末梢より心臓に向つて施してはならない。吾人の生命機能の本然としては、霊は常に中樞部より發動して全身に流衍するものであるが故に、血液の如く、主要器官へ還流するを要せざるが故である。

第五項　甲狀腺

甲狀腺に押法を施すことは、必身を健全に保つ爲めに行ふにしても、治病施法の目的によりて行ふにしても、忘るべからざる一操作である。この部位に施法を傳へたのでは、眉間又は脊髓等の如く、顫動の起ることは稀れであり、又特殊の感應もないのである。然かも傳へられたる霊法は、すべて生命體の活能となつて、全身を榮養することになるのである。霊法を傳へたる結果、霊動も

起らず特殊の感應もないのは、感受性微弱なる爲めかといふに然らず。感應はなくとも、健康保全、疾患治癒の上に有効なることは事實である。

第六項　腹部

腹部、この部位を太靈道に於ては眞府と稱し、頭部に於ける全樞部位と相感應して、靈能發現の源泉と認められてゐる。輓近の醫說によるときは、この部位を太陽神經叢と稱し、重要なる器官であることが稍明かになつた樣である。東洋に於ては、既でに久しき以前から、腹部の重んずべきを知つてゐて、丹田と稱して生命の根源と認め、或は腹腦の語があつて、腹部に於ける腦と認めてゐるが如きは、幾分、全樞眞府との關係を理解してゐたるかの如く考へらるゝのである。この部位に靈子法を傳ふるときは、腹筋全體に顯動用用を誘發するに至るものである。病者又は虛弱者に在りては。この部位に於ける靈子の流衍極めて微弱なるを免れないから、靈子法を傳へてその機能を促進せしめなければならない。要するに腹部は靈の感應極めて鋭敏なる部位である。

第七項　心臟

心臟は、循環器系統の中樞であつて、血液それ自身に靈子作用を包有し、全身に分布されるのであるから、この部位に靈法を傳ふるときには、全身に著しい効果を齎らすものである。靈子作用は、必ずしも血液なる物質を介して、全身に環流するものではないが、血液自體が血管を通じて全身に循環し、血管壁を壓しつゝ進む所から、その血液中に靈子作用が充溢してゐたとすれば、そこに自然に內面的押擦法が行はれつゝあることになるのである。されば心臟部に靈法を傳へることは、全身內外に涉りて隈なく押擦法を施すのと、相近通した効果を齎らすことになるのである。猶、前項骨髓の條下に說きたる如く、靈法を施すのには、腦を中心として身體の末梢部に及ぼすことを原則とするが、心臟疾患のため、血液の還流不全なるときは、末梢部より心臟部に向つて施法することもあるが、極めて特異の場合である。また心臟部は靈的感受性極めて鋭敏にして、靈法を施すときは全身に烈しき靈動を發するものである

自然癒能

第四款　靈能と癒能との關係

本書總論に於て、自然癒能の事を述べたるが如く、人體には、疾患に罹り又は外傷を受けたるとき、それを治癒せしむる機能がある。されば、醫藥や特異の手術に依らずとも、この癒能さへ發動すれば、自然に治癒に就くものであると共に、その發動微弱なる限りは、藥物又は器械等の施用に依ると雖も、治癒するものではない。この機能は、自然癒能として別にある譯ではなく、生命機能それ自體が固有してゐる機能の一面たるに過ぎないのである。現代醫家は、藥物器械を重要視してゐて、その施用によりて疾患は治癒すべきものと思つてゐる。假令、現時に於て未だこの時代に到達せぬまでも、未來に於ては必ず實現し得るものと妄想してゐる。それは、生命機能の不可思議に就て、徹底的理解をもたぬ故であつて、生命機能、その本來の姿に直前して立つときは、これに藥物器械を用ひて治癒を圖るといふことは、極めて精巧なる器械を調整せんとして、砂を投ずるの愚を學ぶものであり、生命そのものゝ尊嚴に對する一種の冒瀆であることを感じなければならない。生命機能の神秘それに異和のあつたとき、即ち疾患に罹りたる場合は、そこに生命保續といふ一大事實が行はれてゐる限りは、また自然癒能が絶えず行はれてゐることを忘れてはならない。若しこれを調節し、これを癒さんと欲せば、生命機能、そのものに對して、或る介助を與へなければならない。然るに、現代醫學者は、生命機能の現象に就てこそ、若干の知識をもつてゐるが、機能そのものに對しては、何等の理解をも有しないのである。されば、生命機能そのものに介助を與ふることは、思ひもよらない所である。靈法家たるもの、宜しくこゝに思を致して、絶對の化育を贊する底の覺悟をもたなければならないのである、嗣下、自然癒能に就て、項を分ちて說述することにする。

疾患は放置するも治すべきもの

第一項　自然癒能

上來屢々說述したるが如く、人體には自然癒能があつて、疾患または外傷を

治癒せしむる上に作用するのである。この事實は、現代醫家も自然良能と稱して、幾分認めてゐる所である。例へば、創傷を受けたるとき、一般にはこれを洗滌し、繃帶するのが常である。然し、そのまゝに放置すると雖も、自然に治癒するに至るものである。尤もその創傷面が大に過ぎ、外物に觸るゝ恐れがあつたり、自然に癒着せんとする創傷面が、外より來る原因のために綻裂する虞ありと認めたるとき、これに適應の措置または保護を加ふることは、この限りではない。兎も角、創傷の癒合といふことは、自然癒能の發動がよく認め得らるゝ機會である。されば治癒そのものは、手術又は藥物の塗付貼付等によるにあらずして、自然癒能の發動によるのである。それは、人類生命體のみに限らず、動物にしても、植物にしてもさうであつて、就中、植物の如きは、可なり大なる創傷であつても、若干の歲月のうちには樹皮を以て自然にそれを包み込むは、常に目擊してゐる所である。されば、我等が創傷を受けたるときは、かの植物に學ぶのが最もよいのである。かゝる言說は、稍常軌を逸したるが如き感あるも、事實は洵にこれを證明するのである。この關係は、內臟または諸種

の疾患に於ても同一であつて、そが治癒するといふのは、如何なる藥物も、如何なる手術も、効果を齎らすものではなく、たゞこれを妨ぐるに過ぎないのである。されば、たゞその創傷なり、疾患なりを增惡せざらしむるだけの措置、即ち疾患なれば攝生の嚴守、外傷なれば創傷面の保護の程度に於て、手當を加ふることを認むるのである。然るに、事實はその價値を顚倒して、物質的介助が治療の上に主要の位置を占め、根本の自然癒能を閑却するがために、今日の醫術が、外傷又は疾患の治療に對して、全的効果を奏せざることになるのである。されば、治病施法に從事する者は、自然癒能といふ事實に當面して、徹底的理解を有するより出發しなければならない。

第二項　自然癒能と靈能

自然癒能なるものは、生命機能の一面の現れであつて、心的には精神機能を構成し、體的には生理機能を組織するものである。更らに、心的に、體的に、疾患ありたるときには、自然癒能となつて顯現するのである。究竟するに、そ

れは靈子の作能であることになる。されば、自然癒能といつても、それが體的疾患であれば、現實の苦痛を治癒する上に作用し、心的疾患即ち精神病、ヒステリーの如き疾患であれば、精神機能整復の上に働くのである。要するに、靈子能が心的にもあれ、體的にもあれ、傷つけられ若くは病めるときには、それぞれ、病症に適應せる癒能となつて、患部に作用するのである。然して、疾患創傷等に於ては、その患部に於ける人體固有の靈子能は微弱となるものであるから、外面より靈子能を加へるのである。これが靈子施法の職能となつてゐるのである。されば、靈子能を外面より加へるといふことは、それが本人自體の靈子能の活現たる、自然癒能力をして旺盛ならしむることになるのである。

現意識靈能によりて施法する場合

第三項　現意識靈能

現意識靈能は、現意識の統制のもとに發動する靈能を稱するのであつて、多くの場合、治病施法に於ては、現意識のまゝに行はれるのである。即ち、疾患あるに當りて、その部位、部位の廣狹、苦痛の狀態等に應じて、適應の措置を施すことになる。疾患部位が、肌膚を露出するのに便ならざる所は着衣の上より、差支なきときは患部に直接するが如き、（靈子治病施法の特性として、平素着衣の爲めに裏まれたる箇所は、特にこれを脱せしむることなし。但し餘り厚着の時に限り、肌膚を露出せしめざる程度に於て脱衣せしむることあり。）また疾患部位が狹小なれば凝指或は押法を用ひ、廣きときは凝掌、又は押擦法を施すが如き、疾患部位の刺戟感强きときは、間隔を保つ爲に凝指、凝掌、然らざるときは皮膚に接着するも可なるが故に、押法または押擦法を用ふるが如きは寧ろすべて現意識によらざれば運營し難きことゝなるのである。殊に、遠隔施法に在りては、病者及び疾患部位に對して、極めて强烈なる思念を加ふると共に靈融法を施すが如きは、すべて現意識によりて運用さるゝのであるから、當然現意識靈能の發動によらなければならないことになるのである。元來、靈能なるものは、超我の心狀を持する間に於て行ふことを要するも、如上の場合に於ては意思を加ふることは己むを得ない所である。されば、現意識のもとに靈能を運營するとしても、靈の發動に對して、意思を以て干渉を加へないやうに

するを要するのであつて、その他に於て思念を用ふることは、靈能作用の上に妨げなきものである。

第四項　超意識靈能

超意識靈能は、超意識狀態にありて、靈能を發現せしむるのである。かの檢診法の如きは、完全なる超意識狀態といふものではないが、それを行ひつゝある間は、超我の稍深き程度に在ることを要するのである。檢診法は、疾患者あるに當りて、その患部を檢診するために用ふる方法である。これを行ふには、手掌に顫動を發動せしめつゝ、患者の身體各部に沿ひて押擦法を行ふがごとくに、手掌を移行せしむるのである。また、手掌に潛動を發動せしめつゝ、患者の全體に移行するのもよい。就れにしても、その手掌が、病者の患部に到達するときは、恰かも吸引せらるゝが如く、その部位に止るものである。これは、疾患部位に於て靈子能が缺如してゐる爲め、またはその部位に癒能を催起すべく、豐富なる靈子能を要する爲めに起る現象である。この際、特に意思を加へて患部は此處か彼處かと想像するときは、靈子能が手掌を支配することが出來なくなるので、假令、手掌が患部に到達しても、そこに接着せざることになるのである。これは檢診の上に施用したのであつて、更らに施法の上に應用せるものとすれば、修靈法の如きがそれである。その方法たる、元來、集團的に行ふべきものではあるが、施法者一人對受法者一人にても行ひ得るのである。即ち受法者は勗めて超我の心狀を持し、正坐合掌して施法を待つ。施法者はこれに對して靈融法を施すときは、受法者の手掌に靈動起り、それが益々猛烈となるや合掌は自然に解かれて、手掌は自然に全身の各部に涉つて、押擦を始めるのである。然して、受法者自身が自覺すると否とに拘らず、手掌は自然に患部に至つて、押擦によりてその回復を圖るものである。然も、これが全然超我の狀態に於て行はれるのであるから、外間よりこれを見るときは、奇態百出して寧ろ怪奇に堪えざらしむるものがある。かくの如きは、淺き程度なりとはするものゝ、超意識靈能と稱すべきものであつて、施法の上には、著しき効果あるものである。

一指を觸るゝなきは施法の上乘なるものである

治病施法としては、靈融法、凝指法、凝掌法、押法、押擦法等の五種の形式がある。そのうち、靈融法は最も効果あり、且つ最も理想的のものである。靈子法の本質としては、一指を觸るゝことなくして靈的作能を傳ふべきものであつて、靈融法は最もこの理想に副ふものである。されど、その施用に習熟せざるときは、或は體力に於て堪えない場合もあるから、當初に於ては、遠隔施法に限りこれを用ひ、直接施法に於ては、他の方法に依るべきである。然し、漸を追ひこの境に到達するを以て目的として進まなければならない。されど、直接施法に於ては、病者の心理として、靈融法のみにては歉らず考ふるが如きことなきにあらず。此際、病者をして安慰せしむるために、他の方法を用ふることは、別の理由に依るのであるから、敢て拘泥するには及ばないのである。これに次ぐものは凝指法である。即ち、指頭より發動する靈的作能が患部に傳はりて、療能力をして旺盛ならしむるものである。然し、これは理想的ではあるが、指頭に靈的作能を凝聚せしむるため、頗る努力を必要とするが故に、當初に於ては、常時用ひ難き所である。凝掌法となると、疲勞を感ずる程度が餘程

減少する傾向がある。然し、行つて比較的樂に感ずるのは押法、押擦法であるが故に、初心のうちは多くの場合、この二者を適用すべきである。殊に、押法押擦法は、非常に卓越せる靈能者にあらずと雖も、患者に傳はるべき靈的作能は、比較的豐富にして、偉効を現すものである。然して、これらの施法に當りて、現意識のもとに運用することは、その性質上已むを得ざる所なるも、超意識に近き超我の心狀を持することが深ければ深きほど、治病上の効果は倍加するものである。

第五項　靈子作用の感應現象

靈子作用は、翩に人と人とが近接せる場合に於て相感應するのみならず、遠隔の場處に於ても相感應するものである。まことに感應は靈子の特性であるとも言ひ得るのである。人は物體に重力があつて、物體相互相感應してゐるといふ。然し、それも物質が靈子に創化されたる結果として、それ自身にこの性能を有するのであつて、物質に引力の存するのを見て、靈の作能の如何に靈妙で

あるかといふことを考へなければならない。それは、獨り物質に於てのみならず、精神にも常時この感應が行はれてゐるのである。例へば、甲者が或る事を思念するとする。その思念の對象となつてゐる乙者が、同時にその思念に感應して同一事を思念するとなる。かくの如きは、往々實社會に於て行はれることである。この現象を目して、世人は精神的感應であるといふ。然し、その感應の能力は當然靈に歸すべきものであつて精神ではないのである。太靈道に於て實修する靈引法または靈斥法の如きは、人體に於ける物質的感應の狀態と見ゆるも、誰人もさうはいはないで靈的感應であることをいふ。それは靈的研鑽に出發し靈的作能を發動せしむる方法を解得しある後に於て行はるゝ修法なるが故に、さういふのである。また靈子通信法の如き、靈子讀心法の如きは、精神的感應と誤想すべき狀態に於て發現すと雖も、これを以て精神的感應と目することなく、靈的感應として取扱ふのである。さりながら、靈引法、靈斥法が、物體相互の引力、斥力と何れの點に於て異るや、また通信法、讀心法の如きが精神的感應と、何によりて差違ありやと推究するときは、誰人も遂に答ふることは、そは物的感應であり心的感應でありやと問ふときは、靈引靈斥、通信讀心等の修法を學びたる限りの人は、然りと答ふるに躊躇するであらう。物質に發動する物的感應も、精神に內在する心的感應も、共に靈的感應であるといふときは、この理論上の矛盾撞著と見ゆるが如きは、容易に解決せらるゝことになるのである。

靈的感應が、近接せる人間相互間に於て相感應するのみならず、遠距離に隔在せる人々の間にも行はれることは、物質に於ける引力の關係を見るも、容易に理解されることになるのである。即ち、一見頑冥不靈と考へらるゝ無機物相互に於てすら、引力といふ遠感作用が行はれてゐるのであるから、靈明の精粹たる靈的作用にして、遠隔に及ぶことなしと考ふることは、寧ろ非常に困難な事であるといふべきである。

靈的感應は、叙上の如く近距離に於ても、遠距離に於ても、相感應するものである。然して、心的感應も、物的感應も、靈的感應を待ちて始めて行はるゝものにして、靈的感應能力、靈修靈養によりて、益々開展するものである。

書信を送るに思念を凝らす

されば、靈能者が特定の人に對して、意思を集中するときは、その特定の人はこれに感應して、これをその精神の上に複現するのみならず、動作の上にも現すものである。靈子治病施法も、それが直接であるにもせよ、遠隔であるにもせよ、この原理によりて傳へられ、且つ實効を奏するのである。

西洋人の間に於ては、他人に書信を送るに際して、單に要務を通ずるといふばかりでなく、精神を罩めてそれを書く習慣をもつてゐる。猶、これを使なり郵便なりに託するにしても、その內容の事實が、對者に受け容れられるやうに特に思念を集中するといふことがいはれてゐる。これは頗る學ぶべき習慣であると共に、事實、その受信者に於ける感情は、事務的に認められた書翰よりも遙かに良好に受取らるべき筈である。これは精神と共に靈の發動がある所からよく對者をして感應せしむるのである。更らに、その人にして靈的修養があるときは、對者をして感動せしむること、一層深刻なるべき筈である。

我等はよく至誠天に通ずといひ、人を感せしむといふ。至誠なるものは、靈の發動であつて、心狀が純化されたる狀態、即ち超我の域に達したのである。

靈子作用の相乘現象

超我なるときは、靈の流衍が最も旺盛敏活に行はれて、精神作用となつたのであるから、よく人を感動せしむるに至るのである。治病施法に於てもこの要諦を心得てゐれば、その効率の上にも、層一層の增進を見るべきである。

人と人との間に感應のあることが、心的にまた體的に、最も敏活に行はれる理由として、太靈道者としてよく理解して置かねばならぬことがある。即ち心理的作用は全樞外放線の作能であり、生理的作用は全樞內放線の作用である。されば心理といひ、生理といふも、靈の內放または外放によりて、その發現の形式を異にしたのに過ぎないのであるから、人と人との間、或は動物に對してまでも、時空を超越して、靈的作用の行はれることはいふまでもないことである。その解釋は、人類生命學の當該條目の下に擧げてあるから、就いて見ることを要する。

第六項　靈子作用の相乘現象

靈子作用に相乘現象といふことがある。それは、甲者并びに乙者より放射す

病者相互の相乘快感

る靈子線が交乘して、それより更らに偉大なる作能を發揮するに至ることである。例へば、一人より發動する靈的作能を一量とする。それが二人聚るときは二量となるべき筈であるのが、二量の自乘四量となる。更らに三人となると三量なるべきものが、三量の自乘九量となるのである。この理は、卓子潛動修法椅子潛動修法等に於ても、能く實證し得られる所なのである。これが疾患の如き場合であつたとすれば、一人の場合に於ては、一量の癒能力が作用するのであるが、二人の場合に於ては、それが二人で四量となるが故に、一人に作用する癒能力は、二量となる割合である。三人の場合に於ては、九量となる所から一人には三量の癒能力が作用することになるのである。太靈道者としてはよくこの理を體識してゐて、巧みに觀察し、巧みに應用しなければならない。殊に治病施法に於ても大にその關係があるのである。

靈子治病施法に應用するとして、多數の病者が或る施法處に集つてゐたとする。その間に於て、その病者より發動する靈子線の內外放は、健康者に比して微弱であるとしても、相當に行はれてゐるのである。それが多數集合してゐたとすれば、その交乘作用によりて、大に快癒を速かならしむることが認め得られるのである。病者に於て、靈の內外放が交乘するといふ現象は、前項感應作用の行はれる理由を參照すれば、容易に理解し得られることである。されば、靈子施法を爲すに當りて、多數の病者を聚めて治療するといふ事は、施法者の努力を輕減するのみならず、疾患の治癒をして速かならしむるものである。また、かの修靈法を行ふにしても、これを一人に對して行ふよりも、多數者に對して行ふことに於て、一層猛烈に發動するものである。これは實に、靈の交乘によるからである。

病者の集合に於て、靈による自然癒能の交乘が行はれ、疾患をして輕快ならしむといつても、如何なる場合に於ても同一結果を見るといふことは出來ないのである。そは異種の病者相互の集合に限りて稱するのである。これに反して同一症狀の病者が聚合してゐたとすれば、癒能力の交乘といふことは行はれても、一面に於て同種疾患の感應交乘が成立し、その一團の病者の症狀をして增惡せしむることも絕無とは言はれぬ。

同一症狀の病者の集合は不可

されば、現代醫家が、各自專門を標榜して醫療に從事してゐる傾向ありと雖も、それは豫後をして佳良ならしむる所以ではない。例へば、呼吸器系統疾患專門の醫院又は病院があつたとする。そこに集る病者は、すべて呼吸器病者である所から、自然癒能力の交乘が行はれないで、その病者の體質或は精神狀態その他諸種の關係に於て同一狀態の下に置かれてある所から、その不良の方面のみの交乘が互に行はれることになつて、その症狀をして增惡ならしむるに至るのである。されば、專門的療養所を設けるといふことは、單に物的にのみ見たるときは、頗る合理的に考へらるゝも、この自然癒能の交乘の原則に反するのである。換言すれば現代醫學の通則としてはその醫員の配置、藥品、機械、診療室、病室等の設備に於て、同種の疾患を診療することは、異種の疾患を取扱ふよりは便利とする點なきにあらずと誰も、これ雖て、科學的療法の破綻を示すものである。我が靈的治病法に在りては、毫もこれらの制限を受くることなきが故に、如何に異種の病者が同時に門戸に集つたとしても、支障を生ずることはないのである。

靈の交乘は精神的にも行はる

更らに、遠隔施法を行ふに當りて、それを聚團的に行はんとするには、同種の疾患を類聚して施法することになつてゐる。これは交乘の原則と矛盾するやの感あるも、この場合に於ては、同種患者間に交乘の行はれることもなく、また交乘をも期待することなく、單に靈融法を施すに際し、思念のまとまりを容易ならしむるためである。隨つてそれは別個の關係になつてゐるのである。

靈の交乘現象は疾患のみに限らず、精神的にも行はれつゝあるのである。精神的に何事をか考へんとするが如き、獨自性、創化性のものは別として、人類は、多くの場合幽居獨棲には堪えざるものである。それは、靈の交乘に對する生物の本然性の然らしむる所である。これは人類に限らず、動物にも、植物にも行はれてゐる現象である。一般世人が、劇場、相撲場、野球、庭球等を觀覽に行くといふのも、名優の所作や、力士、選手の競技を見に行くといふのみが目的ではなく、精神解剖を行ふときは、演技場、競技場等に於ける群集を想像して、それに曉られ、惹付けられるのである。されば、演技者なり、競技者なりの技能の優秀なのを見て樂むばかりでなく、自分と同じやうに觀覽者が多け

れば多いほど、更らに感興を湧かすのである。また、演技者、競技者にしても觀覽者が少きときは、著しく氣乘りがせざるを覺へ、それが多きときは、その技自ら神に入るものであることは、單に精神的に觀察したのでは不充分であつて、そこに靈の交乘が行はれてゐるといふ原理にまで到達しなければ、完全なる解釋を得たといふことは出來ないのである。

靈の交乘は如上の例に止らず、社會萬般の事相の上にも行はれてゐるのであつて、大政治家、大經濟家、大戰術家の如きも、知らず識らずのうちに、この靈の交乘現象の原理を體得してゐて、巧みにそれを應用した所から、大功業を建設するに至つたのである。若しこれらの人にして、靈の交乘現象の原理を體得し且つ應用しなかつたとすれば、如何に超凡の抱負經論があつたとしても、これを實際に施用することは、殆んど不可能なのである。されば、靈に就て徹底的理解を有する人であれば、たゞそれが卓越せる靈能家となるばかりではなく、社會凡總の事物現象に應用して、卓越せる成果を收め得る實際家となるのである。

靈子作用の應用は靈魂の歸趨

靈子作用の應用は治病施法を最とす

第七項　靈子作用の應用

靈子作用の應用は、各論中の一項目であると共に、靈醫學の結論ともなるものである。神學、論證學、宇宙學、靈理學、人類生命學、靈醫學等は、すべて靈理に關する理論であつて、これを如實に立證することは、靈子作用の應用に待たなければならぬ。靈子作用の應用は、洵にこれら尊むべき靈理の歸著點であると言ひ得るのである。然も、それは曾にその歸着點であるといふに止めてはならぬ。假令、靈理の內容に於て如何に深き理解ありとしても、作用を如實に應用しない限りは、實人生と何等交渉をも有せざることゝなるのである。

靈子作用の應用としては、幾多の實驗實修の方法もあるが、これを實人生に應用するには、靈醫學の學理に從ひ、治病施法の上に運營することである。されば、太靈道神學以下生命學は、一として人類必須の學科ならざるはないが、實人生に最も密接な關係を有してゐるのは靈醫學である。靈醫學は、尊むべき人類生命の一大脅威なる疾患を治し健康を回復せしむるを以て、主要の目的と

人類が靈子作用を應用するは絶對の靈寵也

するのである。從つて、その實際家の任責は、重且つ大であると共に、洵に意義深きものなれば、靈子作用の應用能力は、極めて確實でなければならぬ。靈子作用の應用が確實であつて、將ちて患家に臨むときは、凡ての疾患は、及を迎へて解くが如く、治癒に就くことは些の疑ふべき所はない。愆くて、その濟生の上に、また人類靈化の上に齎らす所の成果は、實に偉大なものがある。

靈子作用は人類に限らず、動物にも、植物にも、鑛物にも行はれてゐるのである。然しながら、動物以下には、それが行はれてゐるとしても、我等人類に見るが如き進展はないのである。今や靈子の作用の應用に對する理解を得、これを如實に運營すべき途は開かれたのである。文化的には更らに長足の進展を遂げ、靈的新文明建設の日の甚だ遠からざるを知る。思ふに靈子作用の應用といふことは、絶對よりして、たゞ人間にのみ許されたる靈寵であるとも言ひ得るのである。されば、人間は一面絶對に對する深き理解信奉に入ると共に、人生社會を更らによりよく向上進展せしめ、全眞生活に入るべく渾身の努力を捧げなければならぬ。人類が、靈子作用の應用によりて全眞生活に入らぬ限りは

太靈も、宇宙も無意義である。人間に全眞が活現することに於て、始めて太靈の主張が貫徹せらるゝことになるのである。その機樞關鑰を爲すものは、靈子作用の應用であり、靈子作用の應用の第一歩は、靈醫學によりて、これを如實に運營し、人類疾患を掃蕩し、靈の儼在を體驗するに始まるのである。

再言すれば、太靈道靈醫學は、人類の疾患に對する正しき理解のもとに、その生命を保全せしむるために組織せられた學問である。人類生命現象の單一ならざると共に、病理現象も隨つて複雜なるべきはいふまでもない。さればその生理病理に關しては、多くの星霜をかけて學修する。更らにまた、生命に對して脅威を加へつゝある疾患の治療方法としては、現代物質的醫學に於ては、繁雜なる藥物器械等の施用に待つべきものと考へてゐる。さう考ふることは、靈の消息に就て何等通曉する所なき醫學者、醫術家に取りては、寧ろ當然陷るべき格套でなければならない。これに反して、一旦人類生命の根柢に靈の一大活泉があることを理解するに及べば、かの繁雜なる物質の施用は毫も必要なく、たゞ靈的作能の運營のみにて足り、これが運營の技能も容易に體達し得るとい

ふことは、我等人類の一大福慶といはなければならない。されば我が太靈道者にして、靈の運營によりて人類疾患の治療に臨むは、極めて尊貴なる天務たるは言を要せざるも、そは猶人類生命現象の一部たるに止り、更らに緊要なるは靈による人類の全的救拯である。さりながら個人もまた太靈全眞の活現の全部にはあらず、國家あり、社會あり、宇宙ありて、その上に超劫不斷の靈化は行はるゝのである。太靈道者たる者は深くこゝに思を致し、人類の疾患施法に臨むは、一に太靈全眞の活現を體し、靈的文明建設の一大聖業に參しつゝあることを歡喜としなければならぬ。

太靈道靈醫學（終）

太靈道神學

卷頭辭

主元記

太靈神格の顯現に依りて宇宙成り、
太靈神業の發動に依りて凡總生ず。
太靈神格を理識し、信奉して靈化に參入するは、理智本性と自覺本能とを賦
與せられたる人類最高意思の顯現なり。
太靈神格と直觸し、融合して全眞を具現するは、情操本性と自在本能とを賦
與せられたる人類至上行爲の發動たり。
靈化に參入し、全眞を具現して、　太靈神業に從就するは高塁なる人類究竟
の歸著たり。
太靈道は此人類究竟の歸著を闡明指示して、以て　神業を完成せしむべき

靈命の下に興起せり。

而して太靈道神學は、洵に太靈道各部門に亙る樞軸を爲す。此神學に依りて太靈神格の顯現を眼前に直視し、太靈神業の發動を如實に覺知することを得。

繙くもの先づ須らく左の靈禱詞を唱誦して、然る後靈讀すべき也。

靈禱詞

全眞太靈　全眞太靈　全眞太靈

仰ぎ願はくは我をして靈化に參入せしめ給へ

仰ぎ願はくは我をして全眞を具現せしめ給へ

仰ぎ願はくは我をして神業に從就(ジウシュ)せしめ給へ

全眞太靈　全眞太靈　全眞太靈

太靈道神學目次

序論

第一項　自覺

第二項　認識

第三項　信證

各論

第一項　個性の自覺

第二項　萬有の認識
第三項　現象と實體
第四項　實體の認識
第五項　大實體太靈
第六項　太靈の神格
第七項　絶對體としての太靈
第八項　超越體としての太靈
第九項　全眞體としての太靈
第一〇項　太靈全神

第一一項　神意發現としての個性
第一二項　神意發現としての萬有
第一三項　神意發現の過程
第一四項　靈子及び靈子の作用
第一五項　神意信證
第一六項　信順疑逆
第一七項　神意順合
第一八項　神意逆離
第一九項　禮拜と神意順合

第二〇項　靈禱と神意發現

太靈道神學目次終

太靈道神學は太靈神格を理論的に研究する學問也

太靈道神學

緒言

太靈道神學は、太靈の神格につき理論的に研究する學問である。神とは教義太靈章に「太靈の神格を理信す」とある神格を稱するのである。神格の神の字には、よく神の意義が現れてゐるから、本論に入るに先ちて、それに就て解説を試みることにする。神の字を二分すれば、示と申の字になる。示は自然に示し現るゝ義である。申は口に十を加へて成れるものである。我等がものを言はんと欲するときは、口に十が現るゝことによりて申すことになるのである。何等が口に十が現れて申すことになるかといふに

十は縱のーと横の一から成立つてゐる。人がアと發音せんとするときには宇宙形律の縱が現れ、ウと發音せんとするときは宇宙形律の横が現るゝことになる。このアとウは發音の原因であつて原律と稱すべきものである。他のイエオの三音は副律となるものである。その發音の原因たる縱横の形律が口に顯れたるが故に申すことになるのである。これは實に宇宙形律自然の現れであるが故に、何人も疑ふことが出來ぬ。よし疑問反對する者があつても、縱に口を開かずしてアと呼び、横に口を塞がずしてウと發音することは出來ない。神の字はこの示すと申すの二字から成立つてゐるのであつて、その義から宇宙自然の理法を現すことになつてゐる。換言すれば神は人の口を以て宇宙自然の大理法を言ひ現し示すことである。これは文字の象形によりて解說するに過ぎざるも、古く支那人が考へて造つたとしては極めて巧妙なものである。然しながら、世に神と稱する場合は自然の大理法の顯現たる一面を閑却して、たゞ何となしに宗敎的尊信の對象として用ゐ來る場合が多い。神道に於ける神も、佛敎に於ける佛も、基督敎に於けるゴッドも、回敎に於けるアラーも、すべて信仰の對象、本尊として用ひ來つたものである。近代唯物的科學の發達によりて、是等宗敎的意義は破壞されて、近代人に對して神に就て說明せんとするに、何れも反對して耳をだに假さうともしない。簡單にいへば神は迷信の產物として侮蔑し去るに過ぎない。然し、神の字義からいへば宇宙の理法が言現はされて示さるゝのである。この點に於ては科學と雖も神の觀念を蔑視することは出來ない。科學にして宇宙自然の理法を以て研究の對象とする限りは神の外に出づることはない筈である。然し古來の宗敎に於ける神の觀念は須らく是正すべきものである。神に對する研究は、順序正しき論證によりて成遂げられなければならない。この論證方法は、科學と雖も決して否定すべきものではない。されど神に對する研究は、科學の研究範圍よりも一層廣汎なる所からいへば、科學は宗敎の一分科たるに過ぎないのである。今神に就て理論的に述べんとするには、宗敎者よりも理性に於て發達したる科學者の方がよく諒解さるべき筈である。

神學として神を認める意義の内容は、宇宙自然に行はるゝ一切の根本を認めて神と稱するのである。宇宙には活動あり、自然には理法あり、この活動も理法もすべて一種の相狀である。その本源には主體がなくてはならない。主體を離れては何の相狀も現れるものではない。この主體を太靈道に於ては太靈の神格と稱するのである。神格は尚に一切の主體である。この主體を認むることは、人間に取りては根本的の大問題である。何となれば、森羅萬象成くこの主體によりて發現したものである。人類の思索がこの主體に到達することに於て、萬有の根源を知ると稱せらるゝのである。覺譜に於て大實體太靈と稱するが、一切の根本主體である。その原因たる主體を研究することが、神學の内容であり、使命である。他の宗教にも神學と稱するものはあるも、こゝにいふが如く理論的意義内容を有するものではない。從つて他の宗教に於て稱するところの神學と混同してはならない。要するに、太靈道神學は太靈道獨自の神學であることを諒知する必要がある。

自覺は神の觀念を生む

序論

第一項　自覺

色は眼によりて見ることが出來る、聲は耳によりて聞くことが出來る。鼻によりて嗅ぎ、舌によりて味ひ、身によりて觸る、これら五官作用で知ることの出來る狀態は、凡べて外面より感じ來るものであつて自覺を伴はなくとも知ることを得る。たゞ一つ、神といふ觀念は内面的體驗に出發したもので、五官作用を超越してゐるが故に、自覺によらなければこれを認ることが出來ない。究竟、太靈の神格たるを認むるを得さることになる。但し五官にしても自覺を伴ふことが全然ない次第ではない。自覺といふときは、普通には精神上の問題として考へるが、事實それは精神の問題といふよりも靈の問題である、精神の本源たる靈の問題である。人類に内在するの靈が、精神を支配して生ずる所の現

自覺は靈の發動也

象である。

自覺なるものは靈の發動がなければ生ずるものではない。かの生命に働く所の靈の發動は太靈と直通する。從つて吾人の生命の內面に行はるゝ所の靈の働が顯現することによりて自覺することになる。されば我等が自覺するといふことは、我等の生命の上に太靈が發現せる狀態である。この理由によりて、自覺は何ものよりも尊しと稱さるゝのである。その反面として、自覺に基かざる意思又は實行は虛僞となる譯である。眞實と虛僞との分界は、太靈と直通するか直通せざるかによりて定まるのである。自覺は太靈と直通するものなるがゆゑに、自覺に基きたる意思言動のすべては眞實である。太靈と融合せず、自覺に基かざるものは虛僞である。この標準をすべての人に當篏めて觀察するときは自覺によりて行動する人は正大であり、自覺を缺きたる人は、屑々たる小人であるといはなければならない。

現代人の意思行動には自覺が伴はない。只外部より注入したる學問のみを以て絕對のものとするのに過ぎない。爲めに現代人には思想の中心がなく、所謂

人間の價値は自覺あるを以て也

暗黑のうちに渦水に漂ふ者であつて、全く太靈と直通融合を缺きたる無自覺の狀態に在る者である。

人間には自覺を要す。人間の價値は自覺を有する上に在る。動物には全然これがない。植物にも、鑛物にも、地球にも、天體にも人間の如く自覺を有するものがない。動物には五官があつて、五官を通じて外界の事物を感覺受容することはする。併しそれは自覺を伴ふものではない。人間は五官を通じて來る所の感覺であつても、大なり小なり自覺を伴ふものである。これは全的のものではないが、內面の自覺が外面の五官作用と調和した結果である。

眼に物を見、耳に音を聞く、その他各種の官能を有することは、人間も動物も異つたことはない。されば外面五官のみを以て人間を動物に比較すれば、その間何等の差違を認むることがない。然るに、人間は人間なりとして特に意義あるが如く考ふるのは、たゞ自覺を有するが故である。太靈より吾人人類に特に與へられた意能がこの自覺なのである。換言すれば、人類に限つて與へられたる根本の資格と稱すべきものは、太靈と直通する作能があるからである。

自覺なき所貴任もなければ意義もなし

人間は、人間が太靈より發現せるものなることを自覺する。が、太靈より發現せるは人間のみならず、宇宙間の事物現象の一切が太靈より發現したのである。されば之れらの發現體よりいふときは、その宗祖根原を一にしてゐるのである。この點に於ては、人間と動植物等とは兄弟の關係になつてゐる。たゞ人間から自覺を取除けば、人間としての資格を失ふことになる。されば自覺は人間に於て最も尊いことである。自覺を尊重する精神は、人類の間にのみ認め得るのである。例へば、夢中に惡い事をした人があつたとする。その人に對して憎む者も、恨む者もない。酩町の時に行つた事や、精神病者の實行に對しては責任を問ふものもなく、法律も敢て處罰を加ふることがない。要するに、それは無自覺の狀態なるが故である。人が無自覺で行ふ所は、全く機械的の運動であつて、人間としての行動ではなく、動物の動作と擇ぶ所がないから、その責任を問はないのである。

またこの反對の方面を觀察すれば、人に親切な行爲があつたとする。それが少しも自覺を伴つてゐないとすれば、その親切なるものは人として尊いことは

ないのである。例へば幼兒が貴重なものを人に與へたとする。貰つた人はその品の價値を知つてゐるから、貴重なものを貰つたといふ感がする。併し幼兒には全然その尊さといふものがない。尊さのないのは、貴重なものを與へたのであるが、自覺なきが故に意義を爲さないのである。されば、その幼兒が欲しくなつたから返せといつて來れば、返さなければならない。これはその與へたといふ事も、返せといふ事も、無自覺によるのであるから、その言動の上に更らに價値を認むることにならないのである。

自覺に基づいてこそ人間には價値がある。そは靈の研究が深きを加ふるによりて切實に知り得らるゝのである。自覺は人と太靈との直通融合の狀態である無自覺の狀態には責任がないと共に、意義をも認めないのである。自覺あれば太靈と直通融合あり、そこに責任も發生するに至るのである。

叙上の如く、自覺は人間のみに賦與された特權である。太靈との直通は、翅人間のみに限られてゐる。自覺はかくの如く尊きものである。

認識は靈の發動たるも時に深淺の差あり

第二項　認識

認識は、讀んで字の如く認め識ることを意味する。自覺が絶對より人間のみに與へられた恩寵であると共に、認識も人に限つて與へられたところのものである。尤も動物にも自覺と認めらるべき淺い程度のものがあると共に、認識の萠芽も發見し得るのである。家畜が飼主を知つてゐるといふのは、認識といへば認識である。また自分に害を加ふる者を感識して恐怖するが如きも、認識の一端である。然しながら、それは人間に於ける認識の如く、深き内面の發動より來るものではなく、偶々、外面より來る氣分を感受し、それを辨別するに過ぎざる一種の識能にして、深刻なる靈の發動が精神作用を支配して、内面より漲り出づる認識といふ程度に達したものではない。されど、人間の認識必ずしも常に靈の發動による深い程度のものとは限らない。時として、動物に見らるべき淺い程度のものもある。深い程度のものは内面認識であり、淺い程度のものは外面認識である。

五官によりて區別され認識さるゝは外面認識である。内面に靈の發動があり、精神を支配して認識を形づくるは、いふまでもなく内面的認識である。即ち神の如き絶對の主體に對する觀念、太靈道の見地からいへば宇宙の大實體たる太靈の觀念は外面より來るものにあらず。五官を以てしては、太靈も神も認め難いといふことは明白な事實である。要するに、絶對に對する認識は、外面から形づくることは出來ない。内面よりするにあらざれば、この認識は成立するのではない。内面よりの漲溢があつて、太靈が宇宙を攝理する法則を認識するに至るのである。外面より五官を介して認識するのは、動物的の認識にしてそれだけでは萬有の現象を知ることは出來ても、宇宙の理法を知ることは出來ない。人間はよく理法を知るの認識あるも、動物は全く之を缺如してゐる。現代の唯物的科學の行方は、この動物的の針路を取りて進みつゝあるのである。自覺は、太靈が人間に與へたるものなると同時に、認識もまた同じき關係になつてゐる。外面認識こそ人間以外の動物にも有するとはいへ、こゝにいふ内面認識に至りては人間に限られた所のものである。この尊ぶべき自覺認識が基礎

となつて、始めて太靈の神格を知るに至るのである。

自覺は太靈を知るの窓であり認識は太靈を認むるの門である

太靈の神格は、自覺なければ知ること能はず、認識なければまた同樣の結果に陷るのである。自覺は實に太靈を知るの窓である。認識は實に太靈を認むるの門である。自覺の窓が塞がれ、認識の門が閉ぢられては、どうして太靈を知ることが出來よう。かの無神論者が、飽くまでも神を認めまいとする。要するにそれは內面にこれを認むるだけの準備がないからである。自覺の窓を明け、認識の門を開くときは、神の實體は鮮かにそれに投影し來るのである。現代の科學者は、自覺認識の準備を有せず、爲めに神を語り靈を說く者があれば、槪ね迷信として排せんとする、これは誤である。然して彼等のいふ所を聞けば、神は何處にありや、未だ誰もこれを實驗したるものなきにあらずやと嘲罵を浴せかける。事實、神は內面的に自覺認識すべきものである。五官を介して、外面的に實驗せんとするは、寧ろ憫むべき狂愚である。

自覺認識の發達せる人は、神の實體即ち太靈の神格をまのあたり見ることを得るのである。この自覺認識によりて太靈の神格を知ることを得るに至つた結果太靈に對する思慕は益々高調さるゝことになる。

信證は自覺認識ありて成立つべきもの

第三項　信證

自覺なき者、認識なき者、それは全く神よりして放たれたる者である。自覺認識があつて、始めて信證が成立つのである。自覺せず、認識せざるものに對して信證せよといふことは殆んど不可能である。因襲的に佛敎、基督敎、神道等の敎徒はあるも、凡ては自覺もせず、認識もしない。況んや信證に達する者はさうざらにあるべき道理はない。全世界を通じて、佛敎徒は十億といひ、基督敎徒は六億ありと稱するも、さう多くの人間が眞の信に入るのではない。是は自覺もせず、認識もせず、信證もしない徒輩であつて、傳統的に佛敎なり、基督敎なりの形骸に縋つてゐるに過ぎないのである。例へば、こゝに一團の人がある。それは佛敎徒なり、基督敎徒なり、神道信者なりの人々である。その人々が、曾て神なり、佛なりを自覺し、認識し、信證せるかを問へば、眞にその境地に達した人は、極めて寥々たるものである。一言以て之を蓋へば、眞の

佛教徒も基督教徒もないといふことになる。

内面の自覺と外面の認識と一致するに至りて、吾人の知識は確立さるゝのである。この自覺と認識とは、自己の靈格または太靈神格を自覺認識するのみの機關として、我等に賦與されてゐるばかりでなく、これを宇宙萬有の現象に對しても適用することを得るのである。然して、この自覺認識の一端を以てその指針として萬有現象の研究に歩を進めたのが、科學や實驗哲學である。然しそれには更らに人心の妙機たる信證の力を働かすことがないから、その研究對象に對して、特殊の熱を生じ、愛樂を感ずることがないことになる。此くの如きは現代科學者に於て見る所のものではあるが、また道を求め、道を講究する人に在りても、往々この態度に陷つて、絶對神に直融することを得ないやうな遺憾がないともいへない。即ち自覺認識により、絶對の尊信すべきを知りながらそこに何の熱もなく何の力も生じ來らないのは、究竟、最も必要なるべき信證を缺くからである。

科學者の態度

宗教の方面を顧れば、その態度は前述の科學者、實驗哲學者、理智的求道者とまさに相反してゐる。それには自覺認識に就いて更らに考ふる所なく、たゞ神に對する信を高調してゐるのみである。然しそれは自覺認識に出發して居らないのであるから、その信たる全く盲目的のものである。聖語に於て「信は總ての究極なり。」と絶對信を唱へたるも、一面「段階を經ずして頂上に達し得べからず、段階を無視する者は自ら蹶く。」と稱して、信に入るに當り、必要なる準備とすべき或るものゝあることを示してある。必要なる或るものといふのは自覺及び認識である。自覺及び認識が確立しないでは、眞の信は確立しないことになるのである。さらば。自覺及び認識を得ることは非常な難事であるかといふに、さうではないのである。自覺及び認識の内省があつて、それによりて起さるゝ信であれば、その信は正しく、絶對に直融するに至るべきである。若しこれを缺くに於ては、迷信に陷ることになり、それが卑俗の雜信でないとしても、絶對を以て偶像化することゝなるのである。

迷信雜信の宗教

すべての宗教に於て、徒らに信を説いて自覺認識を缺いてゐる所から、遂に迷信と擇ぶ所なきに至るに鑑み、これに科學を導入して、その内容を整備せん

科學的宗教

とする企畫もあつて、科學的宗教、科學的信仰の聲を聞いたのも、久しき以前の事ではなかつた。然し、それは一種の折衷なので、自覺及び認識よりして力強く發生した信ではない。即ち科學の自覺認識と宗教の信とを補綴したのに過ぎないのであるから、その失敗に終ることは、當初より明か過ぎる所である。その結果が、信仰と理智とは兩立すべきものにあらずとして、宗教方面に於ては、當初の態度に戻つて、信さへあれば宗教生活は成立つものと思惟して、殆んど盲目的に信に向つて突進することになつた。その弊の及ぶ所は、その對象たる神は何でもあれ、信仰さへ純であればよいといふやうになつたのである。

絕對信の高調

太靈道の信

太靈道に於ては、道を求むる段階として、自覺認識の運用によりて、尊信の對象たる神に對し、正しき解釋を得ることを必要とする。かくてその理解が成立つたとすれば、信に入ることを許すのである。教義に理信を說く所以は蓋し是に在る。理信を得たとしても、一層進みて神を顯證しなければならない。信によりて神を顯證する、これが所謂信證である。信證によりて絕對の太靈に直融するの狀態にまで到達して始めて我等の全眞的生活は成立つのである。

各論

第一項　個性の自覺

人は自身の個性の存在を自覺しなければならない。個性の自覺といつてもさう高遠な意義を有するものと解するには及ばないのである。それすら、多くは何等自覺することなく蠢動してゐるに過ぎないのは、現代人の常態である。人須らく個性の自覺なるかべからずとは、敢て太靈道者ならずとも、そが標語として鮮明なる自己意識のものとに生活しなければならない。懷疑派の論者は一切を否定し、神をも、宇宙をも萬有をも否定し去り、最後に自己までも否定せんとする。事實、神を否定し、宇宙萬有を否定し、自己の存在をすら疑問として否定せんとするも、それを否定せんとする自己は、如何にして否定するを得べきか。更らにその、自己を否定せんとする所の自己を否定せんとするも、猶

個性の自覺の意義

懷疑派の論者も自己の意能を否定する能はず

その否定せんとする意能が存在してゐる。されば一切を否定し盡すとしても、否定する意能だけは認めなければならない。

一切を否定し更に否定し去りて、そこに意能が殘存するとする。然らばその意能はすべてゞあるか、意能は絶對のものであるか、意能が萬有であるか、宇宙であるか、神であるか、精神であるか、物質であるかと推究すれば、誰しも然りと答ふるに躊躇するであらう。懷疑論者は、寧ろ甚しくその否定せる神に對し、宇宙に對し、萬有に對し、自己に對し、精神に對し、物質に對しては素樸的一元論者よりも、また汎神論者よりも、これらの事象に對して愛著を感ずるものである。假令、これらのすべてを否定すと雖も、意能の上にそのすべてを顯現したる原因を否定することは出來ない。となると、此否定の意識も、自己も、外界も、神も、その意識面に顯現したるまゝの姿でないとしても、その存在を認めなければならない。これを認むる主體即ち個性であり、個性を意識的に確實に把捉する、これを個性の自覺と稱するのである。

猶附加へて置く。覺譜には「個性我を脱却せよ」といひ、聖語には「我を忘れよ、已を棄てよ、自分を思ふ勿れ。」といつてあるが、それは個性を以て自已の限界とし、他と峻別してたゞ利我のみを圖る愛執の妄を誡めたのであつて、個性の自覺を排斥したのではないのである。

萬有の認識の必要

第二項　萬有の認識

個性の存在を自覺した者は、また外界に萬有の實在してゐることを認識しなければならない。自覺は內面的であり、認識は外面的であることは、既でに序論に於て說いた所である。個性の完全なる姿は、內省的に自覺すべきものであり、萬有の相狀は、外觀的に認識すべきことであつて、自に於て自覺といひ、他に於て認識といふ。それは一つの觀察能であつて、內外に運用するに當りてその規範を異にしたのに過ぎないのである。されば、自覺といふも、認識といふも、理想としてはこれを一個體とし、自覺のうちに認識があり、認識のうちに自覺があるやうにならなければならない。こゝに於てか他に在りて自を認め自のうちに他を容受するに至るのである。

萬有の認識により攝理の尊さを知る

叙上、懐疑派論者が、萬有と自己とを否定すと雖も、否定意能のうちに萬有の姿を投映する所の原因を疑ふこと能はず。恁くてそれが頭を回らし來れば、自己を認むることゝなる。自己を認むる限りは、自己は單獨に存在するものにあらず。他を觀照する自己がある限りは、少くともその觀照に對する他の存在を承認しなければならない。それには種々の形貌賦性の相異るありて、天體、地球、動物、植物、鑛物等、殆んど思議し盡し得べからざる物象があるので、これらの萬有はすべて吾人の五官を通じて認識せられ、更らに吾人の意識の上に投映することになるのである。吾人が神の攝理の尊さを認むることを得るのも、一面、自己の内省によると共に、他面宇宙現象の組成の絶大と、機構の齊整とによる認識に驚歎したのである。天體崇拜が、邈たる原始人の心に萠芽したのも、蓋し同一理由に歸するのである。

第三項　現象と實體

現象

個性も萬有も共に現象であつて、現象はそれ自身、自立することを得るものではない。現象には、成壞生死があつて、時間的には先起現象と後續現象とがあり、その刹那の間に於て存在を有するものである。これを空間的に見れば、地球は汎有の天體と等しく、宇宙の一角に懸り、我等人類を始め諸多の有機體無機體は、地上に若干の位置を占めて居る。この點から見ても、互に依存依立してゐるのに過ぎざると共に、これらの萬有を擧げて一團とするも、猶自立自存ではない。すべての現象は、時間的にも空間的にも限界があつて、それに自立自存を認むることは出來ない。既でに限界といふ觀念の發生したのは、他面に限界を超越した或るものを認むべく暗示すると共に、限界を超越した或るものを否認するとしたなら、限界といふ觀念も出て來る筈はないのである。

實體

我等が個性を自覺する意能は、自然にして存在するにもせよ、測るべからざる或るものによりて創化されたにもせよ、そこに何等かの實體がなければならないことを深く自覺認識せしむるものがある。現象には定限あり、始終あるが故に、それを實體と考ふることは做し得ない。こゝに於てか、吾人の意能は遠く實體に走つて、時間空間の關係に制限せられざるものを憧憬することになる

のである。

第四項　實體の認識

個性の印象の永遠性

我等が個性といふことを考へる。その個性が宇宙に存在してゐたといふ事實は、永遠に不磨のものとして殘存する。個性としての現象は亡滅しても、宇宙に曾て存在したりとする印象は消滅するものではない。そこに何等かの神秘がなければならない。實體を認め得ざる限りは、その印象のみが永遠に殘存する筈がない。こゝに於てか、我等が個性として認むるものは、前項にも記したるが如くその現象たるに止まらず、更らに實體を認めなければならないことを思はしむるものがある。

萬有個性の實體は靈格なり

太靈道に於ては、萬有個性の實體を靈格と稱し、靈格は靈子の個性發動なりといふのである。從來に於て起つた思想は、萬有現象を以て直ちに實體に結びつけて、個性的實在を認めない所から、その結論に於てまとまりがつかないことになるのである。太靈道に於ては、その個性的實驗の承認は、理論よりは寧ろ事實に就て顯證したものであつて、その事實が、太靈道思想の根礎を形成したのである。こゝに太靈道の思想が、諸多の哲學をして憶測を敢てせしめざる理論的正確があるのである。太靈道者たるものは、先づこの實體の認識を確實に把握して置かなければならない。

萬有實體の宗祖たる大實體

第五項　大實體太靈

こゝに大實體といふ。大實體の大は、絶對の意義によりて名けたので、大小の大を意味するのではない。現象あれば實體ありといふことは、叙上の通りである。然して、個性には各々個性的實體がある。個性的實體、これを靈格と稱し、靈格は靈子の個性的發動である。その個性的發動の本源たる靈子は、太靈により創化せられたのである。されば、萬有創化の本源たる靈子も、太靈がその實體たる關係になつてゐる。萬有個性は、靈子の個性發動たる靈格を實體とするのであるから、太靈を實體とすることは稍矛盾の嫌あるに似たるも、究竟を觀ずるに、これらのすべては、太靈といふ大實體に附著せる相狀たるに相違

ないことになるのである。例としては卑近であるが、我等は、父母、祖父母、曾祖父母と、その親祖を有すれども、皆等しく造化の子と稱するに差支なきが如くである。太靈に至りては、萬有を創化すると共に、時間空間に羈絆せらるることなく、時間空間を創化するの大實體である。覺譜に「然り眞に此根本の大實體に至りては超等至上絶限超劫にして、相狀たる現象の成壞生死によりて增損する所なく、曠久常住依然として生滅變化の外に超絶して、曾て卒に盈虛消長あることなき也。」といふのはこれである。

第六項　太靈の神格

人類には人類格あり、動物には動物格あり、物體には物體格ありて、個性の存在する所、すべてその個性格のないものはない。太靈は、是等のすべてを超越せるが故に、特に成格として、現象に於て我等が目擊するが如き現象格はないが、これらのすべてを超越したる意味に於て成格を認めなければならぬ、これを我等は太靈神格といふのである。その神格は、我等の心性の作用を以てしたのでは、到底、その眞相を感識し得るのではない。然し、實際その神格に立脚したる推理の結果に於て明確に認識することは、敢て不可能ではない。のみならず總ての事象の根本に實體を認め、其實體が全眞の本體卽ち神格であることは當然認めなければならぬ所である。されば我等は太靈神格を認識し、それに信順の誠を捧げ、太靈の全眞を現世に顯現することに努むるは、蓋し我等の天務であり靈命であると言はなければならぬ。然して、その信が純熟するに至れば、太靈と融合するの妙域に達し、信證はそこに完成さるゝのである。

第七項　絶對體としての太靈

現象はまた差別關係のもとに在る。天體と天體の關係にしても、天體と地球との關係にしても、萬有にしても、これを空間的に見、また時間的に見ても、一として自立してゐるものはない。太靈は、これら差別現象を創化し、それ自體は他によりて創化されることがない。卽ち、萬有は他の萬有がなければ存在するものでなく、また絶對に附著伴隨せざる限りは、何等の活動を營むもので

はない。色は光なきときは現れず、音響は空氣によらざれば傳播せず、香味觸また何等かに依ざられば發現するものにあらず。太靈は全く絶對であるが爲めに、假令これらの現象のすべてがあつても、またなくても、何等影響されまた消長するものではない。更らに太靈は吾人の知識の上に絶對である。我等の知識は、有るとか無いとか一面に斷定せられたものにあらざれば、何等の理解をも生ずるに至らない。然るに太靈は有を超越し、また無をも超越してゐる所の絶對體である。

超越體としての太靈

第八項　超越體としての太靈

絶對體であるものは、當然超越體でなければならない。太靈は時間、空間を超越し、また在、非在を超越してゐる。教義太靈章に「太靈の超劫超邊超在超非在を理信す。」とあるのはこれである。時間空間を超越してゐるといふのは、これら時空の關係を超越して、絶大であり、悠久であるといふ意味ではない。絶大とか悠久とかいふのであつては、猶時間空間の關係を絶ち切ることが出來ない。で、次に教義に於て超在超非在であることをいふのである。これは時間空間の關係を離脱し、有無を以て論議すべきものでないといふことを説示したのである。如上の諸點を綜觀して、超越體としての太靈と稱するのである。

全眞體としての太靈

第九項　全眞體としての太靈

基督教に於て、神は全知全能なりといふ。既でに知能といふときは、全き神の作能を意味することになつて、神そのものゝ本體を言ひ現すことにはならないのである。全眞といふのは、かくの如き意味に於て用ゐられたのではない。眞といふのは、超然として現象の何ものにも汚されず、何ものゝ拘束をも受けず、何ものゝ思議の對象ともならないことをいふのである。全知全能といふのでは神の知能の大なることを讃美することになつてゐる。全眞といふのは、讃美をも許さゞる至全と純眞とがそこにある。この意味を以て全眞を解釋しなければならぬ。絶對といひ、超越といふのでは、現象に對する否定の語であつて猶そこに不完全なる人類の言葉を以て言ひ現はした歎らなさを感せしむるもの

がある。全眞に至りては、太靈そのものゝ肯定の辭であると共に、我等の思議から隔絶してゐる尊さが感じさせられる。全眞の意義は、斯くの如く我等の思議を許さないものなると共に、事實としては却つて、宇宙萬有の上に顯現してゐる所のものを指すのである。宇宙萬有の成壞生死も、世界がそのうちに向上進展して行くのも、總て太靈全眞の活現であるといふことになる。覺譜に「宇宙社會は太靈全眞の活現にして……」とあるのはこの意味である。されば絶對超越といふのは、差別の諸相と關係を離脱したのに名づけ、全眞といふのは交渉を生ずる方面に稱するのである。

第一〇項　太靈全神

太靈は洵に全き神である。從來に於ける信仰の如く、現象を神として崇拜するのではない。教義太靈章に「太靈は主觀客觀の兩態全一超位」云々と、全神としての成格の一隅を說示してある。既成宗教に在りては、或は主觀的にのみ神を認めて徒らに妄信してゐるものがある。過去に於ける唯心主義の宗教の如

全き信は解釋の一しきと共に觀察の態樣の正しさを要す

きはこの格套に陷つてゐる。現今に於ては覺に眞理の把握し難き失望の創痍を癒さんが爲めに、たゞ信が純でさへあれば絶對神がそこに顯現すと稱して、强いて安立を裝ふものがある。他の一面には、客觀的に神が外在するものとなしてゝ、徒らに迷信するものがある。共に誤つてゐるのである。神は主觀的內在であり、また客觀的外在であると共に、この兩態の全一である。更らにこの三者を超越せるものである。されば、太靈の三成格として、絶對、超越、全眞であるといふことに於て、その理解は正しくとも、これを內在せるもの、外在せるものなどゝ一面に偏して、その觀察の態樣を誤つてゐるのでは、絶對至純の信に入つたものといふことが出來ない。即ち、太靈の成格に於ける解釋が眞實を得、更らにその觀察の態樣が正しきことに於て、太靈神格は顯現したまふのである。これらすべてが具備することに於て、始めて、我等の尊信を捧ぐべく、「太靈全神」と奉稱することを許さるゝのである。

第一一項　神意發現としての個性

個性が神意の發現なると共に個性の自覺がまた神意の發現なり

第一項に於て個性の自覺に就て說く所があつた。こゝには個性そのものゝ本體並びに個性の自覺の由來に就て述べることにする。懷疑派の哲學者は、一切の事物現象を否定し、神を否定し、自己を否定せんとする。恁くてその自己を否定するものは何ぞと推究するに、そこに意能を認めなければならない。意能それは意識する能力といふのに過ぎないのであつて、その本體は何かといふことを考へなければならない。然し、これは現象を以て當てはめるに止つては、竟に何等の解決をも得るに至らないのである。萬有を感識するものは自覺であり、自覺を感識するものもまた自覺である。この感識の上からいつて、若し別にその本體なしとすれば、自覺と萬有とを感識する能力を有する意能を、絕對の神の寶座に据えなければならなくなる。こゝに於てか、曾ての時代に唯心論も起つた所以である。事實、こゝに至りて我等の理智は行詰りとなつてゐるのである。然して太靈道に於ては、この萬有と自覺とを感識する主體を靈格といふのである。靈格は、時空を超越してゐる所から、我等の精神を支配して、時空を感識せしむると共に、時空を超越して感識せしむるに至るのである。然して、靈格は時空と有無を超越してゐるとしても、それが現象に交渉をもつて、個性として發現することは、太靈によりて許された上でなければならない。言はゞ、太靈の攝理によりて顯現するのである、神格の發現によるのである。然して個性の自覺の起るのは、個性靈格を通じて、太靈神格が發現するに至つたのである。

萬有及び萬有の認識は共に神意の發現なり

第一二項　神意發現としての萬有

我等は萬有を認識する。認識といつても、それは五官を通じて感識するのに過ぎない。五官は、極めて不確實なものであつて、視官が損傷せらるゝときには、宇宙に顯現したる色彩は失はれることになる。聽官が鈍痲するときには、音響の世界は壞滅することになる。假令、それが存在しても、色盲者は、色彩を如實に見ないことになる。音響と聽官との關係もまた斯くの如くである。これら恃むべからざる五官を通じて感識したる結果を、萬有は斯くの如く存在すと斷言することは餘りに無謀である。然し、我等は我等が萬有を萬有として感

識した通りのものでなくとも、萬有として感識するに至らしめ、また萬有を感識することを得たる原因がなければならない。我等太靈道者は、靈によりてその解決を得るのである。個性には個性としての靈格があり、萬有には萬有個性としての靈格がある。然してその靈格には時空の障壁がない所から、個性靈格の融合が行はれて、現象上の萬有個性の感識が成立つのである。要するに、萬有は神意の發現であると共に、その感識も神意の發現なりといふべきである。

大靈の全眞より靈子を生じ靈子が精神物質を生じこゝに生命を構成する

第一三項　神意發現の過程

神意發現の過程としては、太靈の全眞より靈子を發現する。それに外放と內放とがあつて、精神と物質を生ずるのである。精神と物質との交乘によりて靈格が發生し、生命體を構成するに至るのである。看來れば、宇宙一物として生命體ならざるものはない。天體には機制の整然たるものがあつて、運行その度を失はないのも、地球が河嶽を載せ萬物を生々して行くのも、すべてそれが生命體なる故である。然して生命體なるものは、天體地球に止まらず、また吾人人類、動植物に限らず、鑛物もまた生命體なのである。一塊の石にも、一滴の水にも、猶生命を宿してゐるのである。これら萬有生命が宇宙に發現するに至つたのは、すべて機遇に應じたのである。宇宙の法則は、二物同時に同一空間を占むることを得ない。この約束のもとに、萬有は次から次へと發現し來るのである。それはすべて靈勅であり、靈命であるといひ得るのである。さりながら、創化されたる宇宙萬有よりこれを見るときは、そこに機遇が熟したときに發現したことをも見得るのである。機遇といつても、それは必然の結果であつて、神意の發現によるのである。更らに、二物同時に同一空間を占むることなしといつても、吾人の感機がさう感識すべく產みつけられたのであつて、神意が吾人の自覺認識に發現する一方に於て、萬有の成壞生死が行はれて、走馬燈の如く、吾人の認識面を走過するのである。若し神意の發現がなければ、宇宙に何の現象も生じないことになるのである。

第一四項　靈子及び靈子の作用

靈子は太靈全眞の第一次的發現なり

靈子潛動及顯動

靈子は太靈全眞の第一次的發現であつて、萬有創化の原由となつてゐる。その作用としては內放と外放とがある。然してその外放は時間の因である。時間は狀態にして、それには精神といふ實質がある。內放は空間の因であつて、空間には物質が擴大塡充されてある。また靈子の內放運動が潛動となり、外放運動が顯動となり、人類生命體に應現することになるのである。その靈子の潛動及び顯動を心身に發現せしむるときは、心身の狀態をして全眞ならしめ、絕對ならしめ、超越ならしむるが故に、精神肉體の關係を突破し、時間空間の羈絆を離脫し、靈妙なる作能を體現するに至るのである。靈化の極、太靈に融合しその神格に直觸するの境地に達するのである。こゝに至りて、自覺認識、それは太靈神意の發現によるとは雖も、猶精神の一作用なることを免れないのであるが、如上靈化の極致に至りては、純乎、靈と靈との交通によりて、絕對を顯證するに至る尊ぶべき狀態である。

第一五項　神意信證

神意信證の五條目

神意は實に靈子法の實修によりて、よく太靈に融合し、顯證し得るに至るのである。人一たびこの境地に達したる限りは、その生活もまた全眞ならしめなければならない。それには五つの條目がある。即ち左の如し。

靈命自覺
純愛至力
忘我棄己
獻身聖勞
全眞具現

覺譜に「何をか宇宙の目的とし、何をか社會の理想とし、而してまた何をか太靈の主張とはする、曰く向上進展是れ宇宙の目的とする處、曰く全等和合是れ社會の理想とするところ、曰く至全至眞是れ太靈の主張とする所たるなり」とあるのが、この五條目に現されたのである。靈命といふのは、太靈によりて定められ、人類に授けられた所の任責である。然して、我等には神意の發現によりて個性の自覺がある。されば、汎有人類に授けられた任務であるといつて

大靈道は愛と力の教なり

も、自己のみ獨り選ばれて授けられた任務であるといふ自覺に到達しなければならない。かの釋尊が天上天下唯我獨尊と獅子吼したのも、孔子が天、德を予に生せりと唱へたのも、基督が自ら神の子を以て任じたのも、日蓮が我ありて日本國はあるべしと宣言したのも、すべて選ばれたといふ自覺に出發し、自己の矜持を述べたものである。太靈道者には、特に太靈道者としての天務任責があることを意識する、これを靈命自覺といふのである。この靈命ある限り、凡總事物に對して純愛を注ぎ、至力を盡し、我を忘れ、已を棄て、身命をも惜まず、聖勞に從ふの覺悟があり、努力がなければならない。聖勞といふのは、單なる勞務に服するのではならない。聖勞とは、その人の分に從つて獻身的に天授の聖務に從ふのであつて、國を治むるのもあらう、道を傳へるのもあらう。その他凡百の精神的及び肉體的の勞作をいふのである。然かも、その聖勞のうちに純愛至力の溢溢があつて、太靈の全眞を具現しなければならない。

太靈道は、愛の教であると共に力の教である。諸多の宗教は愛の一面に偏してゐる。また法政の上には力の一面が強く現れてゐる。その爲めに、地上に恆

久の平和が來らないのみならず、世衆が靈化に入る途が塞がれてゐる。さらばといつて、漫然政教を一致せしめたのでは、その弊害の及ぶ所、今日より更らに甚しきものがあらう。それは、どうしても如實の源より流れ出た愛と力の働きを、實體そのものとの融合によりて、世界に具現して行かなければならないのである。愛と力とは、實に太靈の神意による二面の發現であつて、我等人類はその體現者となり、地上に全眞境を建設しなければならない。

第一六項　信順疑逆

聖語に「信は順なり、疑は逆なり。」と說いてある。人と人と相對したときでも、そこに信がなかつたなら、兩者の親みは成立つものではない。更らに、その間に疑を挾むやうになつたら、すべてに於て融合を缺くことになる。然し我にして彼を疑はず、よく彼を包容するの至誠があつたとすれば、彼は我を疑ふと雖も、遂には我の至誠に感孚して、我を信ずるに至るであらう。されど信といふことは、人の感孚を期待するが如き功利的觀念に出發したのではなく、總

てに於て他を信ずるの態度をもたなければならない。即ち覺譜に「人、我を疑ふと雖も、我、人を疑はず。」又「世界、我に背くと雖も、我、世界に背かず。」といふが如き心狀をもたなければならない。それは容易に行ひ難いやうであるが、我等にして忘我棄己の體現者である限りは、求めずしてその境地に達するのである。これは人と人との關係に止らず、人と神との關係にしてもまたさうである。但し、神と人との關係は、斯くの如く相互的のものではなく、神は究竟の信である。我等にして、心を啓いて神に信を捧ぐる限りは、そこに容易に神との融會は行はるゝことになるのである。これに反して、疑は神意を壅塞して通ずべからざるに至らしむるものである。

神は究竟の信なり

神意順合は神格の信に出發す

第一七項　神意順合

神意順合は、太靈の絶對、超越、全眞の神格を信ずることに出發するのである。神は絶對の信である。我等の生活はすべてに於て全眞を缺いてゐる。罪惡の聚積が人間であるとも言ひ得るのである。靈光のうちに攝壺して、我等の心の奥に潛んでゐる信の萠芽が如何に小いものであらうとも、それを見出して養ひ育てゝ敢て廢することのないのは神である。世にこれより大なる信があらうか、これより大なる愛があらうか。我等は、神の愛と信とを體して、「大愛は信せざるものを救ふに在り。」の聖語の旨を具現しなければならない。我等にして心を虛しくして、太靈の懷に投ずるときは、直ちに受け容れて神の愛子とせらるゝのである。神は實に信ずる所に現れ、疑ふ所に隱る。神に隱現の別はないが、人の信疑によりて現れまた隱るゝのである。聖語に「信は力なり。」といひ「靈はすべての究極也。」といふのは、靈が神意に順合する唯一の道であることを說示したのである。信は洵に、神と人とに對する愛の至極したる狀態であると共に、神と人とを動かす原動力である。

信は愛の至極したるもの

人は疑によりて破る

第一八項　神意逆離

人は疑によりて自ら破るゝものである。疑は神意の發現を妨ぐること實に大なるものである。慢、怒、詐、訪、嫉、憎、怨、これを七妄と稱し、名、利、

神意逆離による殃禍

色、これを三慾と稱し、努めて拂盡すべきことを敎へてある。これらの七妄三慾が心に萠すときは、全眞を傷ふこと甚しと雖も、猶靈の光に接することが出來る。それは各種の色眼鏡を通じて外界を觀察するが如きものであつて、色彩こそ如實でないとしても、猶事物を見ることは出來る。併し眼を閉ぢて了へば何の見る所もなく、視覺の上には外界と關係を絶つことになる。七妄三慾はかの色眼鏡のやうなものであつて、環境を如實に見んとするには、その眼鏡を取外すが如く、七妄三慾を拂却せよと敎へたのである。然るは、疑は眼を閉ぢて見ざらんとするの類であるから、遂には神と絶緣して、已を危くすることになるのである。聖語に、「光ありと雖も、自ら遮るものは照されず。」また「道ありと雖も、自ら背くものは導かれず。」といふのは、すべて神意に逆離した所より自ら招きたる殃禍であるといはなければならない、されば、道に入らんとするには、先づすべての疑悔より離れなければならない。

第一九項　禮拜と神意順合

禮拜の形式

禮拜とは、單なる形式に止つてはならない。全靈、全心、全體を捧げて、絶對の大御神に融合するの用意があることを要する。今禮拜の形式を左に記す。

正坐若くは正立の形式を執り、右掌を左掌の上に置き、下腹部の邊に安んじ、瞑目し、少しく頭を下げ、法唱を唱ふるのである。法唱は三唱、九唱、二十七唱、孰れも可なり。默唱、音唱またその時宜に從ふ。

禮拜の理想

この形式に從ひ禮拜を行ふ瞬間、全く我を忘れ、環境を忘れ、太靈と我とが融會一致せるが如き絶妙感を生ずるに至るのである。靈宮の安置せる處なればその大前に於て行ふべく、安置なき場合は、禮拜に最も都合よき處を擇び淨室と定め、これを行ふべきである。毎日朝拜、午拜、夕拜、夜拜と、一日四回宛行ふを通則とするも、時宜によりて午拜、夕拜を省略するを許す。

禮拜の理想としては、神意に順合する所以であつて、自己を放捨して絶對に融合するの法式で、自己と世界とを太靈のうちに見るの修法である。ゆめゆめ單なる形式として行ふやうな事があつてはならぬ。

靈禱の形式

靈禱の意義及び理想

第二〇項　靈禱と神意發現

靈禱は、全靈、全心、全體を捧げて太靈神格に直觸し、神意を個性の上に發現せしむる法式である。即ち左の如し。

當初に禮拜を行ひたる上、正坐又は正立して下腹部に力を充實せしめ、左の中指と食指とを伸ばし、他の三指を屈し、恰も拇指を以て無名指を支ふる樣にし、而してその伸ばしたる中指及び食指を左の指全部を以て固く包握する。その儘、これを下腹部に當てゝ、思念を凝らすを要す。

この態度姿勢を以て、全靈、全心、全體を捧げて祈るときは、神意はこれに感應して發現するに至るものである。然して、この靈禱の目的が、世界の靈化にもあれ、乃至社會の平和、國家の隆昌、その他個人凡百の事、すべて行つて宜しからざるないのである。

靈禱の理想としては、自己の淨化に出發し、神意の發現を祈る法式にして、

人は常時靈禱せよ

世界靈化の成就

いはゞ、太靈の顯現を自己の個性の上に見るの修法である。

人は須らく常時靈禱しなければならない。太靈の攝理は、宇宙に遍ねく行はれてゐる。然も、太靈に對する信證の能力は、たゞ吾人々類にのみ許されたる靈寵である。我等はこの靈寵を空しくしてはならない。我等はこの靈寵により て、深き感激の涙に浸ると共に、太靈が我等に降したる靈命の如何に大に、天務の如何に重きかを知るのである。されど、それには餘りに力乏しく、德が薄いことを痛切に感ずるのである。我等の上に靈佑靈護の加はることのない限りは、どうしてこの靈命を遂げ、天務を果すことを得よう。されど、力乏しく德の薄いことは今にして始つたことではない。もとより太靈神格の知ろしめす所であらう。知つて然もこの靈命天務を授けたまふ限りは、どこかにそれを遂行し得べき途が備へられてあるのであらう。「總てを太靈の攝理に委ねよ。」とある聖語の旨に從ひ、安んじて自覺せる靈命のもとに、聖勢に服すると共に、たゞ仰いで神格の佑護を請ふべきである。こゝに靈禱の法式がある。須らくこれに遵ひ、常時、靈禱を捧ぐべきである。神意乍ち發現して、世界の靈化はそこに

成らん。

一條に全眞の道にかなはむといのるこゝろに神や宿らむ

靈禊せよ

靈禊せよ

常時靈禊せよ

太靈道神學（終）

大正十一年十一月十七日印刷
大正十一年十一月二十日發行

【非賣品】

著作兼發行者　田中守平

印刷者　八木政治郎
東京市小石川區小日向水道町八十一番地

印刷所　太靈道印刷部
東京市小石川區指ヶ谷町百二十二番地

發行所　太靈道本院
東京市麹町區一番町四十二番地
電話九段二〇三六番・二〇三七番
振替東京三三二三〇番

終